
どこか遠く

HOTD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこか遠く

【ZPDF】

N1694K

【作者名】

HOTD

【あらすじ】

『その願い、叶えてしんせよ』

その声がきつかけだつた。

注 この作品は、多分に「都合主義」、「厨二成分」、「キャラ壊が含まれています。

1話（前書き）

ところが、ぐだぐだとスタート。

元旦。

暇だった俺は、朝から一人寂しく初詣になんぞ行った。
信心深くもなければ、人混みが嫌いな俺がわざわざ人がゴミのよ
うだ！な元旦の神社に行く理由はただ一つ、神頼みだ。

時が過ぎるというのは案外早いもので、つい最近高校生になつた
と思つたら、目の前には受験と卒業が待ち構えていたという次第で
ある。

故に、神頼み。無いよりマシとか、猫の手も借りたいとか、藁に
もすがりたいとかそんな理由。

神様もきっと、こんな時ばかりワシに頼りあつてからいーとか思
つてるに違いない。

そんなわけで、とつととお守りを買い、後は神頼みを済ませるの
みとなつた。

そうこうしてる内に俺の順番が回ってきたわけだが、さて何をお
願いしようか？

つて、考えるまでも無く第一志望に合格出来ますようことに選
択肢一択なはずなのだが……

? 受験なんて忘れて、どこか遠くに行きたい。
? 受験なんて忘れて、どこか遠くに逝きたい。
? 受験なんて忘れて、どこか遠くで逝きたい。

眼前には、こんなものが浮かんでいた。

なんだこの選択肢は。

どうやら、俺の脳は受験を前にして幻覚を見せるほどの疲労を感じているらしかった。

待て待て、何故受験に合格が無い？そもそも、～とは《イク》の意味あいが違うだろ。有り得ないって。

『ふむ。では？じやな？その願い、叶えてしんぜよ？』
「は……？」

頭上からそんな声が聞こえた気がした俺がそちらを見上げると、眼前に迫った巨大な鈴が落ちてきて……

その日、俺の望まぬ願いは叶うこととなる。
その存在を代償にして。

2話（前書き）

いまだ主人公の名前も明かされず

「いってえええええ！」

『『うるさいわい、そもそも今のぬしに痛みなんぞあるかい』』

「ああ？ あんなバカデカい鈴が落ちて来たら……って、あれ？」

田の前にいる爺の言う通り、ついさっき、自分の顔面に直撃した鈴によつてもたらされたはずの激痛は、それが嘘であつたかのようになつて、失われていた。

『『言つたとおりじやううが、じゃあ早速送るぞい』』

「いや、待て待て待て…」

俺に向けた爺の持つ杖が、かん高い音を立てながら光るのを見て慌てて止める。

『『なんじやい、騒々しいのう。ぬしら人間はほんに煩いわい、せつかく今年は眞面目に働いとるといつのに、ぬしみたいな人間ばかりじやからわしゃやる氣がせんのじや』』

俺は神社に居たはずなのに、周りを見渡せばただただ白が広がるばかり。そこに、ほつんと佇む爺と俺。

ぶつぶつ愚痴る、爺を前に俺は疑問をぶつけまくった。

「なんだよ、あんた。なんだここは？ 俺をどうした…」

しかし、それが気にいらなかつたらしい爺はイチロー顔負けのスイングで俺の側頭部に先端の光っている杖をミートさせる寸前に、

『騒々しいわ！今からぬしし、マーティアルを送るから勝手に理解せい。そして、遠くでよろしくやるとよこわー！』

「ちよ、やめ、ぶつ！」

恐ひしい勢いで、ぶつかって来た杖によつて意識を刈り取られる
こととなつた。

そして、意識を失う寸前に爺の言つといひの、マーティアルヒヤウ
が頭の中に流れこんできたのだった。

「あんの、じつじにいーーー！あ？なんだこの頭の中に浮かんで来る
のは……」

田を覚ますなり、爺に頭部を殴打されたことを思い出した俺が爺
を探そうとしていると、唐突に頭の中に浮かんでくる文字に邪魔を
されることとなつた。

《猿でもわかる、初心者マニュアル

状況を理解していない、そのキリヒト捧ぐ。

これから、今の状況、そしてこれからどうすれば良いかについて
簡単に説明しよう。

さてまずは状況についてだ。

まずは、おめでとうと言つておいつ。キミの願いは叶えられた。
どうだうか？お気に召しただうか？

当然お気に召したはずだよね？
しかし、それはキミの間違いだ。

私は十年に一度、神社に降りる。そして、鈴を切つたものの願いを叶えるのだ。
ここまで、言えばもう氣づいてるかも知れないが、わたしは神だ。
はは、驚いたかい？

108の願いから、特に強い想いを3つの選択肢を選び出すんだ。
そして、その中から選んだ一つの願いが叶えられる。

故に、今キミが居る状況はキミが本心から望んだものというわけだ。

さて、次にこれからどうすれば良いかだが。
好きにしたまえ。キミが、叶えられた願いによって何を得たかは
わからない。

が、即物的なもの。例えば、お金や恋人だとかいうものではなく、
何かしら危険のつきまとつ願いを選んだキミ。
というか、このマニュアルを読むような事態になつていて、
ことは、少なからず危険のある願いを選んだはずだ。
だが、安心して欲しい。

脳が危険を感じると、いくつかの チカラ を解除するよう^テ
弄つておいた。

人によって、発現するモノは違つが、まあ役に立つはずだと思つ。
さて、これでキミに伝えることは全て伝えた。
もしわからないことがあれば、頭の中このマニュアルを思い浮かべて欲しい。

登録されている内容であれば、可能な限りキリの助けになるだろ
う。

それでは最後に、キリに幸あれ。

全世界神様委員会会長ぜづす』

マニアルを読み終わった俺は、その内容を頭の中で反芻し、じ
っくり考えた末に一つの答えにたどり着いた。

「つて、アホかあああああ！全世界神様委員会会長ってなんだ！ぜ
うすつてあのゼウスか！そして、何よりつ」

俺は、田一杯空氣を吸い込み叫んだ。

「いじはどこだあああ！」

周囲は見渡す限り、森森森だった。

「はあはあはあ、不毛だ……といえず、どこか人の居る場所に…

「…

そもそも、どこか遠くとは言つたが、いじはどこなんだろうか？
日本なら良い、言葉は通じる。しかし、外国なら…考えたくもない。
英語なんて、喋れないぞ。

「とりあえず家に帰る。そして、真面目に勉強しよう。現実逃避
なんてするから、罰があたつたんだ。それにしても……」

異様に疲れる。歩いても歩いてもなかなか進まない。

「グルオオオオオツ！」

「はは、疲れて幻聴まで」

「グルオオオオオツ！」

「なんだかすぐ後ろから迫つてくるような迫力だな……」

「グルオオオオオツ！」

「ははは、リアルだなあ……はは……」

「グルオオオオオツ！」

ドスン、ドスンという地鳴りにさすがに自分を誤魔化すことも限界も近いと悟った俺は、恐る恐る振り返り、

「あ、死んだ」

振りかぶった熊の右手によつて、またしても意識を断たれた。

《スロットが解放されました、確認して下さい》

意識が断たれる瞬間にそんな声を聞いた気がした。

3話（前書き）

ついに主人公の名前が判明。

「ん……痛つ」

「起きたで」「ざるな」

目を覚ますと、知らない天井が目に入るより先に、一矢うちを覗き込むようにして見ている目の細い（てか、瞑つてね？）な女の子と目が合つた。合つてるんだよ……な？

そんなことを考えながら身を起しあうと試みたが、肩から胸にかけて走る痛みに顔を歪め挫折。

「い……つてえ」

「まだ動かない方がいいで」「ざるなよ。応急処置はしたで」「ざるなが、傷が深そで」「ざつたから」

「応急処置……？」

「あいあい、お主は熊に襲われたで」「ざるなよ」「熊、くま……そつだ！熊！マジで死ぬかと思つたー・そもそもなんで熊が？」

「実は……」

そして女の子の口から語られる真実。

熊相手に修行中だつたところ、深い一撃を喰らわせた所までは良かったが、不意を突かれて逃げられた。その熊が逃げた先に居たのが俺で、追いついた時には手遅れだつたこと。

「というわけで、拙者が未熟だつたがゆえに逃がしちやつたで」「ざる。いやー、すまぬな。はつはつはつ。あ、ちなみに熊はちゃんと仕留めたからも「安心で」「ざるな？」

拙者、と妙に古臭い喋りをする何故か忍者のコスプレをした女の子が頭を書きながらからと笑う。

それを見て、俺も釣られるなうに笑い

「ははは、そつかー倒したのかー……つて、笑えねーよ！？この怪我お前のせいいかよ！つーか、嘘吐くならもつとマシな嘘吐け！なんだ修行つて！なんだ熊を倒したつて！お前みたいなガキに、ンなこと出来るかあああああつ！」

「あ、ちなみになんの修行中だったかは秘密でござるよ?」ンン

その格好で、ニンニン言つてゐるくせに何の修行か秘密とかバカにしてるのかこのガキ。

もういいよ、突っ込むのにも疲れたわ。それより、

「ひひほほじだ？ キミみたいな子が居るからこは日本なんだよね？」
日本のビーハー

「五、」

「おまえが生きていれば、おまえの命が何よりも貴重だ

卷之三

「茲買アソフカ、茲買カ

滋賀？そこか
滋賀か

俺が住んでいるのも、滋賀県甲賀市。つまり、神様とか含めて俺の現実逃避だつたわけだ。

卷之三

「一ノ井、伊豆守は、おまえの仕事だ。おまえの仕事だ。」

「あーはいはい、家に帰つて勉強しなき

「お世話になつたみたいだから感謝はしつく。ありがとね」

熊にやられたと思っていた胸も、確かめてみると怪我一つなかつ

た。むしろ、前より肌が綺麗になつた感をえある。

しかし、布団から立ち上がつた俺は田の前にあつた鏡を見て驚愕する」となつた。

「は……？」

「む？ 鏡が、どうかしたでござるのか？」

「ちつちやく……」

「ちつちやく？」

「ちつちやくなつてゐるー。」

「？？？」

鏡に写つたその姿は、自分の子供のころの姿そのものであつた。

「いや、まあか、そんな……どいか遠くつて過去のことなんか……？」

「過去？ こつたいお主どうしあつたでござるのか？」

「えーと、キミ。今つて、西暦何年？」

「はあ、西暦でござるか？ 1996年でござるが……」

「んなバカな！ 新聞は！？」

「あいあい、ちょっと待つでござるよ～。ホレ、新聞でござる」

「1996年7月26日……マジかよ」

8年前だつてか？ 笑えねえ……つまり、今の俺は10才つてことかよ。

「ど、どうしたでござるか？」

「なあ、滋賀県甲賀市甲賀町 - × × つて、どいかわかる？」

「こんな女の子に聞くのは間違いかも知れないが、俺は藁にも縋る思いで聞いてみた。

そして、悲しいかな予想を裏切る（ある意味正しこ）形で答えは返ってきた。

「ん。その辺り一帯は、お主が熊に襲われた山のはずでござるが？」「はは……なんていつた

俺が住んでた所の近くには山なんて無かった。ここは一九九六年で、俺の家があるはずの場所には山。つまり、どこか遠く、つてのは過去、かつ別世界の日本つてことがわかったわけだ。

「ははは……ダメだ氏のつ」

「む、何か訳ありのようだぞ。され、拙者に話してみてはどうかな？」

「お前みたいなガキに話したってどうでも……」

そこまで言い掛け、さあまで細かった少女の目がしかと開き、真剣な表情でこちらを見ているのに気がつき、俺は自分の身に起つた出来事について、ぽつりぽつりと語り始めた。

「なんと……そんなことが

「信じられないだろ？自分でもそうなんだから、お前が信じなくて

も

「信じるで」「それよ

「構わ　は？信じる？」

「あいあい、拙者、人を見る目はあるつもりでござるのよ。やえこ、お主が本当のことを見つけると信じるでござる」

細目の少女はそう言つてこつこつと笑つた。

その時、何かわからないが、心が軽くなつた気がした。

「お前……」

「楓で「jやるな、長瀬楓。楓でいいで「jやるな」」

「楓、か。俺は只野忍、忍でいいよ」

「忍殿で「jやるな、忍殿はしづらく家に居るとここで「jやるなよ。里の者には、拙者から説明しておくれで「jやるから」」

「それは助かるけど……里って?」

「秘密で「jやる。二二二」」

「いや、まあいいか……それからよろしくな、楓」

「あいあい~」

ひつして、俺の新天地での生活はスタートすることとなつた。

4話（前書き）

主人公、気絶してばかり。そして突っ込んでばかり。
楓書くの難しい……

感想頂けると嬉しいです

楓の家にお世話になると決まった畠山の「」。
どうやら、俺は捨て子ということになつたらしく、拾つた楓が、
責任を持つて面倒をみるとことで落ち着いたらしく。

「ところどもあ

「ん? なんで「」か?」

「楓つて何歳なの?」

「数えで8歳で「」よ

「8歳児(実質7歳)に面倒見られる俺(精神年齢18歳)って…

…」

衝撃の事実に完膚無きまでに打撃のめをれそつこなつた。主に精神が。

といふか、8歳にしては精神が落ち着き過ぎだらう。

「修行の成果で「」る。あ、なんの修行かは秘密で「」るよ。ニン

「突つ込まないよ? あえて」

「む」

「そんな不満そうな顔をするなら、せめて普通の服を着たらどうだ
! 素性を隠す努力くらいしてみせや!」

まだ1日しか経つて無いとはいえ、忍者ルックな楓しか見たことが無い俺がそう突つ込んでしまつのも無理はなかつた。

「それはさておき」

しかし悲しいかな、さとおかれてしました。

「忍殿は、これからどうするでござるか?」

「どうするって言われてもな。好きにじりとま言われたけど、何し
たらいいかわからぬいし」

「言われたとは……ああ、マニコアルといつかつてござるな。それ
で調べてみてはいかがかな?何かわかるかも知れぬぞ」

「そういえば、わからないことがあればマニコアルを使ってみる的
なことを言われた氣が……よし、やつてみつか

確かに、頭の中でマニコアルを思い浮かべて

《パーソナルデータのロード中 マニコアルが起動されました》

すると、頭の中に機会的なアナウンスが流れてきた。

「マニコアル出た!」

「おお!して、なんど?」

「待つて、今調べるところだ」

えーと、"これから何をすればいいか" つと。

《解答 『自由』》

無機質な声で無情なことを言われた。

「ひで」

「む、ひつたでござるか?」

「『自由』、つて答えが返ってきた

「そ、それは酷いでござるな」

「へへ、じつなつたらアリ端から聞かねえへつてやるー・俺の居た世界には戻れるのか?」

『**解答 不可**』

「俺はなんでこの世界に来たつ?」

『**解答 本人の真の望みによつて**』

「俺が居なくなつて元の世界でどうこうになつてN?」

『**解答 変化無し**』

「それなぜこいつ意味だ?」

『**解答 質問を正しく入力してください**』

「ちつ、俺が居なくなつても元の世界に変化が無い理由は?」

『**解答 あなたの世界での、あなたといつ存在は、新たな世界に転移した時点で消失しています。ゆえに、存在が無い者が居なくなつても変化は起こりません**』

「この世界での俺の存在はどう扱いになつてゐ?」

『**解答 不明**』

「ははは……ダメだ。やはり死のう」
「ちよ、どうしたで?死ぬか!?」

楓の心配する声をよそに、俺はネガティブ街道まつじぐらだった。

「くそ、いつなつたら片っ端から聞きまくつてやるー俺の居た世界には戻れるのか？」

忍殿は皿を睨って質問を口に出して言った。

「俺はなんでこの世界に来たつ？」

「俺が居なくなつて元の世界でどうこういとなつてゐる？」

「それはどういう意味だ？」

「ちつ、俺が居なくなつても元の世界に変化が無い理由は？」

「この世界での俺の存在はどう扱いになつてゐる？」

そして少し間が空き、

「ははは……ダメだ。やはり死のつ

「ちょ、どうしたどうぞわかるか！？」

ひたすら質問していた忍殿が、突然ネガティブ全開になつたので、拙者は慌てて忍殿の身を揺さぶつた。

「ふふふ、俺はもう死ぬんだ……現実逃避し過ぎて異世界に来ちゃつたんだ、もう戻れないんだ……あははー！」

「い、これは……」

皿に光の無い忍殿。

重症かも知れぬ……面倒をみると決まつた以上、拙者がなんとかせねば！

「忍殿、こつたこづいたで、」
「わるかー、拙者に話してみるで、」
「！」

「あははははー、あははははははー、」

「むう、これはいかんな……すまぬ、忍殿」

「あははははぶッ！？」

拙者が、忍殿の首に手刀を落とすと、忍殿は眠るように意識を失つた。

「つーむ、どうしたものか……

「拙者、実は忍者でござる。」

「まさか気づかれて無いことでもーーむしろ、少しきびしきへつした
わー。」

驚愕（もろいんぱつた通りの意味で）の事実を「アホでいいの楓。

「いやこや、忍殿が驚くのも無理はござります。拙者の偽装は完璧だ
つたでござるからな」

「俺は楓がどこまで本気なのがわからんこよ。……」

「どうわけで、まずは食料調達から覚えるでござるわよ。修行する
にあたって、自給自足が基本でござる」

どうこうわけだと突っ込みたい気持ちを抑えながら、楓に尋ねる。

「自給自足ってのは山菜でも集めねばいいのか？でも、山菜の見分
け方なんてわからないんだけど」

「拙者が教えるでござるから、忍殿は一つずつ覚えれば良いでござ
るよ。まずは、キャンプを作るでござる」

「つよーかい」

楓に着いてしまじか歩くと、川がすぐ田の前にある、キャンプに
適しているっぽい場所に出た。

「ほい、つていうのは俺にキャンプに関する知識が無いからだ。念
のため」。

「この辺つが丁度良むかつでござるな、では早速キャンプを張ると
するでござる」

「あ、俺も手伝ひ向す」「ニンニン」れば、つて、おこいこい
！？」

もう何度も目になるかわからない突っ込み、そして突如4人になつた楓を、更にはその4人の楓が早業でキャンプを組み立てていくのを目についた俺は、軽く無い目眩を覚えた。

「「「「「つむ、完成でござる。つと、何か言つたでござるか忍殿？」」」

4人の楓がぐるりと同時に振り返り、やはり同時に言葉を発する。そんな楓を見て、俺はただただ溜め息を吐くことしか出来なかつた。

「ふう、食つた食つた。美味しいもんだな」「それは良かつたでござる」

あのあと、親鳥を追いかける雛鳥の「」とく楓に着いて行つた俺は、山菜採りのノウハウ（分身が印象的過ぎて覚えて無い）と、川魚を獲るノウハウ（ポポーンとか音が聞こえるくらい軽快なジャンプからクナイ投げ。勿論出来なかつた）を教わると、早い夕飯を済ませたのだった。

「そろいえば風呂はどうするんだ？」
「ん？ それはホレ、あそこにて」

楓が指差す方向を見て見れば、いつの間にか設置されていた、ドラム缶風呂と思わしき物と、その火の調整をしていく楓の分身2体。

「なんてシユールな光景なんだ……」

「 もや、入るで！」 もやる

「 も、ああ。じゃあ、お先に風呂もひつわ

風呂に入らひづらム出にひづくと、

「 もや、脱ぐで！」 もやる

「 遠慮などなせりす！」

「 ちょ、やめこ…自分で脱げるかい、やめひ…アッ…！」

身ぐるみを剥がれた俺は無理矢理ドラム缶にぶち込まれた。もうお婿にいけない……。

そんな感傷に浸つていてる時だった、

「 では、拙者も失礼して」

「 え？ ちょつ」

俺に向かい合ひ、楓がドラム缶に入ってきた。勿論身につけているものなど何も無く、興奮した俺は

「 つて、興奮するか！ そんな趣味は断じて無こつ…」

いきなり意味不明な言葉を発した俺に疑問符を浮かべるも、楓の興味はすぐに移った。

「 ？？ 昨日負つたはずの傷が無い…………？」 どうしたことでじざるか？

「 あ、俺もわからない。怪我したのは間違いないんだよな？」

「 うむ。拙者、間違ひ無く手当てをしたで！」 もやるから

「 じやあじつして……そいえば」

「 む？」

俺は思ってたんだが、田舎の廻し商いのマニュアルを呼び出した。

「なんで、俺の怪我が治ってる?」

『**『解放されたスロットによる副産物です』**

確かに、そういうえば氣絶する寸前に何か聞いたような?とにかく聞いてみるか。

『**『解放されたスロットってなんだ?』**

『**『解放されたスロットとは、神による恩恵。状況、そして個々のパーソナルによって目覚めるもの。それがスロットです』**

じゃあ、俺の傷が治ったのはスロットとやらのおかげなのか。最初にマニュアルに書いてあった”チカラ”ってのはこのことだったのか。でも副産物ってのは?

『**『なんのスロットが解放されたんだ?』**

そして、その答えが俺の人生を大きく左右する原因になるということが、この時の俺は気づいていなかった。

『**『**『パッシブスロット、戦闘民族の解放を確認しました』****

5話（前書き）

今回からが本編といひついでしようか？
麻帆良に行かないとい、話は進まないといふで、今回まことに時間
が飛びます。

感想頂けると嬉しいですー
むせび泣きます！

俺がスロット解放によつて得た能力、”戦闘民族”。いわゆるサヤ人。どうやら、その特性が俺に備わつたらしい。

マニユアル曰わく、

- ・深いダメージを負つた上で回復すると戦闘力が大幅に上昇。
- ・修行によつて、さらに力の上昇が可能。

・超人的な回復力。

・現段階では不明（どう考へてもスーパーサヤ人です）

まあ、確かに自分次第では確實に強くなれるだろ？

しかし、だがしかし。

こんな能力が役に立つ機会など、この日本においてそつそつあるはずがない。

「そう思つていた時期が俺にもありま『只野さん、後ろです！』しきつー？」

桜酒？（確かこんな名前）さんの警告とほぼ同時にきた、背後からの一撃を受けて宙を舞いながら、『これが全部夢だつたらいいのになー』なんて、こつちにきてから既に何度も繰り返したせいで、癖になりつつある現実逃避をまたしてもやつてしまいそうになるのだった。

楓に拾われてから、特にやりたいことも、やるべきことも無く、楓の修行に渋々付き合つて4年と9ヶ月。

時には、野犬の群に襲われ。

時には、野生の狼に襲撃され瀕死になり。

時には、野生の熊にまたしても襲撃されて瀕死になり。

時には、なんかやたらと動きの洗練された熊（忍熊）というのを後に知つた）に襲撃されて瀕死になつたり。

他にも、修行と称して、滝から落とされたり、崖から落とされたり、怪しい色をした薬を飲まされたり、突然後ろから斬りかかれたりエトセトラ、エトセトラ。

楓に戦闘民族的能力について教えてからといつも、毎日がエブリディだった。

じゃなくて、毎日が地獄だった。

そのお陰か、身体能力は里でもダントツで一番だったし、11歳で中忍、12歳で上忍入りを果たすといつ、甲賀の里でも史上初と言われるほどのスピード出世となつた。

特に潜入任務と白兵戦においては、忍の右に出るものはないとの言葉を里長から頂いたほどである。

そうそう、忘れていたけど、楓の父親が里長だったんだ。

楓みたいなガキが、どうすれば里の人間に、俺みたいな身元不明のガキの滞在許可を取ることが出来たのか不思議でならなかつたのだが、それを聞いて納得したのだった。

そして俺は、正式に里長の息子として引き取られた。つまり、楓の義兄になつたというわけだ。

上忍になつた際に、何故か楓と婚約するしないの話になつたが、俺は逃げ出した。

話はそれたが、そんなわけで山中にある甲賀の里にて、修行したり、学校行つたり、任務行つたり、任務行つたり、任務行つたり、修行したり任務行つたりな4年と9ヶ月を俺は過ごしたわけだ。

そして昨日。

珍しく、任務も修行も学校（学校は春休みだつたが）も無かつた俺が、里の外に出る許可を得るために義父の元へ訪れた時のことだつた。

「忍か、ちょうど良かつた」
「何かよつでもあつたの？ 義父上」
「うむ、お前には明日から転校してもらつことになつた」
「は？ 何をいきなり……」
「場所は、埼玉県にある麻帆良学園本校男子中等部。名前くらいは聞いたことがあるだろ？」「うう……」

確かに、聞いたことがある。麻帆良学園と言えば、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まつてできた都市。

老若男女、麻帆良学園を知らぬ者は誰もいないと言われるほどに有名な場所だ。

「何故そんな場所に転校を？ 里の外に出るなら、わざわざそんな場所に行かなくとも」

「楓をな、外の世界にて研鑽を積ませたいのだ。そして、あの学園にはそれを積むに値する秘密が……」

あえてその先を言わず、何かがあると匂わせる義父上。

「べ、別にそんなこと言われたって気にならないんだからねつ……いや、ガチで。

「それと、俺の転校に何か関係が？まさか、楓が心配だから、俺に着いて行けとか言つつも「忍よ。これは、任務ぞ！」りじゃ……はあ。承知！」

「これでもシノビのはじくれ。任務と言われた以上は長の命に従う他無い。

「うむ、では早速出発しなさい」

「え？」

「楓には既に準備させてある。お前の荷物も、ホレこの通り

義父上はそう言つと、懐から旅行用のボストンバックを取り出す。どうやってそんなことにしまつたんだ！って、俺が突っ込むと思つただろう？

俺は悟つたね、ちつちゃこことは気にすんな、わかちこわかちこ、つてな。

「この世界そんなこと気にしてたら生きていけないのだ。

そして俺と楓は、その日に麻帆良学園へと旅立つた。

麻帆良学園に着いた俺達は、長から、既に学園に話は通してあると聞いて居たので、それぞれ男子中等部、女子中等部への入寮手続きを済ませると、そのまますぐここ就寝。

翌日。

どうこう訳か、俺は学園長室に呼び出されていたのだった。

「つむ、キミが忍君じゃな？」

「えーと、自分で何が用でも？」

「キミのことは、甲賀の長からよく聞いておるぜ。シノビとしての腕は里長にも劣らず、白兵戦と、潜入任務は当代一じゃとか？ そのうえ、成績も優秀らじこのう」

シノビの方はともかく、中身18歳（今は22歳だが）の俺が、小学校4年生から勉強をやり直して、成績が悪い訳が無いのは当然だった。

むしろ、受験間近だった俺が中学レベルの勉強が出来ないとか恥ずかしさで死ねるレベルだ。

「はあ、それはどうも。で、本題に入りませんか？」

「では、そうしようかの。本題というのは、キミの仕事の」とじゅうが、とりあえず金曜と土曜でよいか？」

「は？」

仕事？ 金曜と土曜？ なんのこっちゃい。

「フオ？ 長から、楓ちゃんはともかく、キミのことは自由に使えるってよいと聞いてあるのじゃが？」

「あんのジジイ……！」

引き取ってくれた時は優しい人だと感心したが、俺と戦つて負け

てからとこゝもの、やたらと嫌がらせが増えていたりする。

「その様子じや知らんかったよつじやの？しかし、困ったの。貴重な頭数じやと勘定に入れておつたのじやが……」

「いえ、やりますよ。一応、義父上にはお世話になつてますからね。それに、仕事というからには勿論これも入るのでしきつ。」

これ、と学園長に向かつて指で作った輪つかを見せる。すると、学園長はしかと頷き、

「もちろん。甲賀上忍を雇うんじやから、一日一ヶ月は五千円まで貰うせい」

「一万、ですか？」

学園長は指を一本立てている。

「いやいや、十万じや。一晩で、十万。どうじや、破格じやね？」

「まあ、確かにウマい話しありますけど……相応の危険はつきまとうのでしよう？」

「つむ、それについて話しこそにはちと大事なことがあっての。里長の信頼も厚いキミを信用して明かすのじやが、実は、この学園には魔法使いがあるのじや。そして、わしも魔法使いなのじやよ」

「へー」

「す、少しは驚いたりしてはくれんのかの？」

異世界に来たと思つたら若返つてて、しかも自分を保護してくれた人間が忍者で、さらに自分が戦闘民族になつていて！以上のことが無ければ、魔法使いが実在している程度は、なんてこと無いのだ。

「で、それがどうかしました？」

「わしの孫娘、木乃香というんじゃが、それがちと訳ありでの。身を狙われとるのじゃ」

「それは大変ですねえ」

訳あり、ね。気になるけど、シノビとしての経験上、じつじつとは知らない方が良かつたりするのであえて追求はしない。

「うむ。さらにこの学園には、図書館島に眠る、禁書の山もある。ゆえに、学園への侵入を企む者も少なく無いのじゃ。昼間は、誰かしらが気づくから良いのじゃが、深夜はやはり交代制での」
「で、自分は金曜と土曜の深夜に、警備と侵入者が入れば排除を行えば良い、と。わかりました、お受けしましょ」

深夜、長くとも7時間程度働いて10万。

任務より簡単で、こき使うという割にはたつたの週2勤務。ここは天国か？

「フオフオ、ではキミの相棒となる子を紹介しようかの。そろそろ来るはずじゃが「失礼します」尊をすればじやな」
「この子が相棒、ですか？」

扉から現れたのは、なんと小学生ほどの女の子。
前髪を左側に引っ張って結った、サイドボニー（立てるかは知らん）にしているのが印象的な少女だ。あと、刀らしきものを手にしている。

「桜咲刹那です」

「刹那くん、彼がキミの相棒になる」

「あー、只野忍です。よろしく」

「キミ達には、しばらくの間パートナーとして深夜の警備をして貰

う。では、早速今日から働いて貰おうかの

「こんな子供、と言いかけたが、良く考えればちちやい頃（昨年
辺りから）きなり色々大きくなつたので、昔のことを言つ時はこいつ
表現している）の楓は、8歳の身にして分身やらなんやらやってい
たわけだし、見た目では実力を計れないことを思い出した。

「あー、桜里さん？ 今田からようしぐね」

「桜・ざ・き！ です、よろしくお願ひします。私はこれで、失礼し
ます。では、後ほど」

「じゃあ、俺もこれで失礼しますよ。今日は学園内を楓と二人で見
て回るつもりだったので」

「刹那くんと仲良く頼むのう。 フォフォフォッ」

その夜。

「では、行きましょうか
「了解」

世界樹を中心に、麻帆良学園本校男子中等部、女子中等部までが
俺と桜酒さんの警備範囲。

他の場所は、他の警備班が受け持つて いるらしい。

一通り警備を終え、暇を持て余し始めていた時、事は起つた。

「なんか……一人?いや、数が増えてる?」

自分の気配を消し、目を瞑り、人が持つ気を頼りに広域的に気配を感じ取る。

これが、俺を潜入術において甲賀一と言わしめる所以だ。

「2、5、10、まだ増える?なんだこれは」

数が50に到達しそうといつ頃、一つの気配がこちらに向かってくる。

これは……桜酒さんか。

「只野さん!」

「わかってる。侵入者は、50。じゃなくて、51名。どうやら俺たちが一番近いみたいだ」

「本当ですか…どうしてそんなことが…?」

「それは……企業秘密ってことで。これでも一応、シノビなんでね」

そんな軽口を叩きながら、侵入者の居る方に向かって駆け、桜酒さんも俺を追つて走る。

そして、

「なんだこりゃ。ハロウィンにはひと早いだろ……」

眼前に広がるのは、50もの異形。

「鬼です。召喚出来る数は術者により異なりますが、この数だとほ

ぼ間違いなく一流の術者でしょ？

「あー、連續召喚みたいなのってのは可能なの？」

「可能か不可能かと聞かれれば可能です。しかし、もし出来るほど
の魔力があるのならば、わざわざ小分けにせず一氣に出していくで
しょ？」「

いや、それはどうだろ？まあ、可能といつことが判かれば、ひとつ
ちは万が一の時のために余力を残して戦うだけだ。

背から小太刀、”雲水”を静かに抜き放つ。

田の前には、2メートルもありそうな一角で一つ田の鬼。
そいつはニヤリと口を歪め、

「なんや、見慣れん場所に呼ばれた思つたらガキ2人かい。悪いけど
こいつちも仕事やからな、片付けさせて貰うで」「

「驚いたな、喋れるのか」

「兄ちゃん鬼みたの初めてか？喋るのが人だけやと思つたら間違いや

「ああ、鬼が喋ることにも驚いたけど、まさか首を斬られても喋つ
ていられるとは。桜酒さん、こいつどうもったら倒せるのかね？」

「只野さんー何を呑気に話しえ？」

「あ、？」

鬼はそれだけ発すると、首が動体から転がり落ちて地に倒れ伏し、
虚空へと消えさつた。

「なんだ、ちゃんと首を落とせば倒せるんじゃないかな？」

「なつーこの間にー？」

どうやら桜酒さんは俺の動きを追えていなかつたよつで驚いてい
る。

それにしても、今のは念の為に放つた本気の一撃だったわけだが、思つたよりも鬼は強くないようだ。

始めは、現代日本において戦闘民族的能力がどれほど役に立つものかと思ったものだが……確かに自分次第では確實に強くなれるだろうか。

しかし、こんな能力が役に立つ機会など、この日本にそういうあるはずがない。

「もう思つていた時期が俺にもあります」只野さん、後ろです……」「しぶつー？」

背後からの一撃で宙を舞う俺。すると、これまでのことが走馬灯のようになつた。

異世界で忍者になつて、異形と超バトルつて、なんかの漫画かよ。そんなのは、マガジンかサンデー辺りでやってるよ。受験を前に現実逃避したつてだけなのに、この罰は酷くないかい神様よ？

「只野さんつー！」

「走馬灯の……って、大丈夫大丈夫。俺わりと丈夫なんだ」

宙を舞ながらひらひらと、桜酒さんに手を振り、体を捻つて着地。胴を上下に切り離されて、ドサリと崩れ落ちる狐面の鬼。

「またー?ビツヤツて……」

「だから、企業秘密でいるわよ。にんにん」

茶化しながら、わざとらしく胸の前で印を組んでみたりして。

まあ、攻撃された瞬間に超速で一回転して胴を斬つただけですよ。

「えーと、桜酒さん術者任せでいい？」

「あ、はい……つて！」この数を一人で大丈夫なんですか？」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。パパッ、と終わらせるからパパッと。俺の実力の一端は見たでしょ？」

「わかりました、ではここはお任せします……それと、私の名前は、さ・く・ら・ざ・き・ですか！」

「はいはい、気をつけてー！」

さくらざき、ね。よし、覚えた。

桜沢さんが、逃げる術者を追つて、ある程度離れたのを確認してから俺は戦闘モードに移行する。

聞くところによると、桜沢さんはまだ小学6年生（もうすぐ中1）だとか。

「そんな子に、鬼のミンチなんてスプラッタは見せられんよな。倒しても、数秒は消えんようだし」

「兄ちゃんちよつとはヤル見てーだが、嬢ちゃんの前で少し見栄張り過ぎたな。ちつと痛い目みとこうか？」

「じゃあパパッと行くかパパッと」

「はじめよかあつ！」

「「「「いや。もう、終わりだよ」」」

発せられるのは、鬼たちの後方。

俺を囲むように、48体の鬼がじりじりと包囲を狭める。

しかし、やがらこの後方4方向から、俺の影分身4体が右手を突き出した状態で突撃。

右手に宿すは、つづまきな忍者の必殺技である

「「「螺旋丸つー！」」」

中心にいた俺（本体）は、螺旋丸発動と同時に巻き込まれないようここジャンプ。

チャクラと氣は本質的には似たようなものらしいへ、思いつきでやつてみたら完成してしまった。

一度人間に使つたら、ただの肉片になつたので使用禁止指定にした技だったが、異形で、かつこの数を相手にするなら問題無いだろう。

何より、消えてくれるのであと片付けの心配が無い。

「さやつ」
「ぐおつ」
「むおつ」
「うがああああああああー!？」

成す術も無く、問答無用で氣の渦に巻き込まれる鬼たち。

「トドメ、つと」

四方からの螺旋丸で、中心に圧縮された所で、空中からのトドメの螺旋丸。

四方から、そして上方から圧縮された鬼たちは、またたくまにノチ（以下自首規制。

「ほら、パパッと終」

残つたのは、螺旋丸によつて地面に刻まれた亀裂のみ。さて、桜沢さんの方はどうかな？

その後、すぐに桜沢さんと合流。

捕縛された侵入者を、学園長に引き渡した後に初日の任務終了となりました。

「今日はお疲れ、桜沢さん」

「ですから、さ・く・ら・ぎ・き・と何度も言えればあなたは……」

「あれ、そりだっけ？じゃあ俺はもう帰るから。また明日、”桜咲”さん

「あつ、待つ」

後ろから何か呼び止める声が聞こえた気がしたけど、華麗にスルーしました。

今日も、毎から楓と学園内を見て回る約束があるから少しでも寝ておきたいのだよ。

「あれ、そりだっけ？じゃあ俺はもう帰るから。また明日、”桜咲”さん

「あつ、待つてくださいーあの技はいつたい？」

声を掛けるのが遅かつたのか、聞こえていて無視されたのか、只野さんは足を止めることなく影に溶けるように消えてしまった。

「まったく……良くわからない人だ」

人の名前をすぐ間違えると思ったら、私に感づかせる事無く相手を斬り捨てるほどの剣捌きを見せ、48体も居た鬼を5分も経たず

に殲滅してみせる戦闘力。

まあ味方であるから、心強い」とには変わりないのだけど。

「ういえ、学園長先生が、あの若さにして甲賀の里でも屈指のシノビと言っていたな。

「確かに、昨日同室になつた長瀬と同郷だつたはず。少し探しを入れてみるか……」

田の細い、胸の前で印を組んで二一ノ二ノ三言づくせに、忍者といふことを必死で否定する同室の少女を思い浮かべながら、部屋に戻る刹那であつた。

「クク、どんなヤツが来るかと思えばなかなかに面白いではないか

あの、超人的速さから繰り出される一撃全てが必殺の威力。気づいた時には斬られているのだから、それも当然だろう。

もつとも、それがまかり通るのはBランクの相手までで、AランクやSランク、そして自分のよつた化物ランクには、それだけではなく通用しない訳だが。

「まあ、私には遠く及ばんがな。そういうえば面白い技を使つていたな、少し遊んでやるか……」

学園、さらには魔法世界において、田をつけられてはいけない人物ナンバー1に忍が田をつけられた瞬間であつた。

5話（後書き）

ちゅーわけで、一気に時間が飛んじゃつた5話。
いかがでしたでしょうか？本編開始の一年前あたりですね。

里長への辺りは、完全に作者の適当設定です。

今回出てきたランク。

作者の中では、こんな感じに設定してあります。

- 化物：エヴァ、ナギ、ラカン等
- S：フェイト（弱）、アルビレオ等
- A：魔法世界編時のアスナ、刹那等
- B+：本編開始時の刹那等
- B：一般的に、一流と言われるレベル

Bの所だけ細かくわけましたが、他のランクもBみたいにピンキリがあるみたいな感じです。

その他、質問ありましたらどうぞ遠慮なく聞いて下さい。

6話（前書き）

今回はちょっと短め。
さらなる感想待ってます^v^

麻帆良に来てから1ヶ月。

麻帆良学園本校男子中等部に転入した俺は、毎には可もなく、不可もなく、な中学3年生として生活を送り、夜には学園の警備員として働いていた。

「んー、まあこんなもんか」

「しかし、拙者まで買って貰つて本当に良かつたで」やるか?

「問題無い。最近ちょっと懐が潤つたんでね」

そしてつい先日、警備の報酬が手に入つたのだ。

そんなわけで、中学3年生にしては潤いに潤つた懐とその足で、学園都市から出て携帯を買いに行つていたのだ。

「そういえば最近、刹那の口からやたらと悠の名前を聞くので、いるが?」

「ほう、ついに俺にも春が「それは無いで」やる「……ですよねー」

5年近くも経てば、呼び名から殿も外れる程度には親しくなる。ましてや、今は義理とはいえ兄妹。忍と呼びすでにするよに約束された。

桜咲さんが、俺のことを話してゐて何の話だらうか?
やつぱり、最近しつこくくらいに聞かれる、強くなるための方法だらうか。

あ、話は変わるが楓のルームメイトが桜咲さんといふことを最近知つた。何かの作為を感じるのは気のせいだらうか?否、気のせい

ではあるまご。

「刹那とはじこで知り合つたで」「やれるか?」

「つてこいつと?」

「刹那に聞いてもまぐらかされたやつだ」「やれるか?」。おもか忍、お主

……

楓がいつもの糸田をカツと開く。

普段ほのぼのした感じを醸し出している分、本気になつた楓は結構迫力がある。

「な、なんだよ?」

「よもや、中学生をナンパしたわけでは……」

「中学3年生（中身23歳）が、中学1年生（実質12歳）をナンパして何か問題「ほほつ?」ありますよね!だから、こんな所でクナイ出せなこでトセコツ!」

“ナンパして”まで言つた辺りから、皿をギラコと光らせ、いつの間にかクナイを手にする楓。

「ともかくだ、別にお前が心配してるようなことは何もないつ!」

「……別に。心配してるわけでは」「やうんが」

とか言こつつ、先ほどのギラギラした雰囲気から一転、いつものほのぼの。

「ふつ……話は変わるけど、麻帆良学園つておかしくないか?」

「おかしい、というと?」

「例えば、朝からやらかしている中武研の女子。聞けば、あれでまだ1年生で、しかも部長も勤めてるどが」

別に強いのが1年生だとか、部長が1年生だからおかしいってわけじゃない。

おかしこのはもつと根本的な所だ。

「古菲でいざるな。実は拙者と同じクラスでいざるのよ。拙者も忍ま
でではないでいざるが、アレはなかなかやるでいざる」

「そこだ、そこがおかしい」

「は？」

何か問題が？と、両腕を組んで首を傾げる楓。

「俺やお前ほどでは無い」と言つても、アレの強さは本物だよ。しか
も、まだまだ伸びしろもある

「で、いざるな」

「でも、考えてみる。あんなに強い中学1年生の女子。日本的に有
名でも、おかしく無いレベルだ。しかも可愛いー！」

「可愛い……？」

「いや、ま、待て。はやまるな」

またしても、クナイを手にした楓を宥めながら話を続ける。

「とにかくだな、あんなのが居てテレビの取材の一つか二つ来ない
方がおかしい」

「うーむ、そう言われてみればそんな気がしなくなこでいざるが」

「おかしいのはそれだけじゃない、世界樹と呼ばれるほどに馬鹿で
かい木とかもそうだが、今の世界の技術力では有り得ないロボット
とかな」

「まあ、確かにそれはそうでいざるな」

「何よりおかしこのは、それらを見ても“すげー”以上の感情を抱

かない先生及び生徒共だ。この学園、絶対なんかあるぞ。楓も気をつける

任務のことだから楓には教えないため口には出さないが、 “魔法使いがいるってこと以外にな” と、心中で付け足す。

「あいあい」

楓の返事を頭の隅で聞きながら、この学園で過ごした1ヶ月を振り返る。

そして、改めて確信した。

忍者が居るんだから、魔法使いが居ることくらいは別に問題じゃない。

問題なのは、そこに居る奴らが、異常を異常と思わないという異常。

最低でも、楓が卒業するまでの3年間はここに滞在することになつているのだ。

楓のためにも、そして自分のために、この学園を少し調べてみる必要があるな。

「集団催眠かけられたりしてな」

「催眠術でござるか？ それなら拙者も一度見てみたいでござるなあ

その予想は、あながち的外れでもなかつたところを、のちに知ることになる。

学園を調べ始めて、早数日。

女子中等部に通っているロボットについて調べた。

わかつたことは、何者かによる情報及び技術提供によつて200
1年に作られたということ。

楓と同じクラス、さらにロボットの開発者自身も同クラス。
あと、同クラスの外人の少女に付き従つてゐるということ。
あとは、何故かいくつかの武装が搭載されていること。
それ以上はいくら調べても出て来なかつた。

そして深夜、

次に、世界樹について調べるべく、まずはその歴史を知るために
図書館にせつてきわたけなのだが……

「あぶつ」

タライが落ちて来たり。

「ちょつ」

矢が飛んできたり。

そして、『カチッ』

「うつ、埋まるー埋まるううううー。」

本の雪崩に巻き込まれたり。

くそぅ……氣を張つて無いと、いきなりには弱いんだよなあ。
奇襲に弱いってのは、かなり致命的なのだ。

「痛つつつ……つたく、いつたいなんなんだ」の図書館は…」
「なんなんだは」からのが言葉です」

突然声が降つてきた。
見上げるとそこには、

「あ、紐バ」「見るなですつー」「ぶつ」

深夜。

「ゴールデンウイークを使って、図書館島に合宿に来ていた私達。立て続けに聞こえる、罠の起動音と悲鳴。

「痛つつつ つたぐ、いつたいなんなんだこの図書館はー。」

続いて聞こえる怒声。

周囲を確認すると、気づいたのは私一人。好奇心が恐怖心を上回り、恐る恐るそこへ向かつた私がみたものは……

「なんなんだはーいひの呪詞です」

本の山に埋もれている、忍者 のコスプレした不審人物、

「あ、紐パ「見るなですっ！」ぶつ」

もとい、地べたに這いつぶばつて、私のスカートの中を覗く変質者でした。

「いきなり踏むなよ

乙女のスカートの中を覗いて、踏まれるだけで済んだことを、

「そんなことされたら、気持ち良くなつちや いや、嘘ですー。[冗談ですからつーやめつ、本の角はやめ」

『ガツ！ガツ！ガツ！』「スッ！」

「ふう……悪は滅んだです」

まさか踏まれて快感を得るタイプの変質者だと私は思ってませんでした。

と、こんなことをしてゐる場合には、とりあえず、ハルナ達を起こして、

「人一人殺しかねない勢いで殴つておいて、なんて清々しい笑顔してやがる」

「なつー、この間にうしろに」ま、悪い夢だったと思つて寝てなよ」

……はうう

背後から肩に手を置かれ、それに気づき振り返ろうとして覚えていのままで。

「目が醒めたら、本に埋もれていたのは自分だった、と?んー微妙だなー。まあ、とりあえずネタ張にメモつとくよん」

「寝ぼけてるの、ゆえー?」

「変な夢やな」

「夢なんかじやないですかー」

気づけば本の山に埋もれていた私は、とりあえず三人を大声で呼び起こしたです。

私の話しを聞いて、全く信じる気が無い。といつより、未だ寝ぼけている様子の三人。

「それよりですね……」

早くこの本の山から私を助けて欲しいのですが……

本に埋もれた少女と愉快な仲間達を、物陰から見つめる怪しい人物。

その怪しい人物とは……まあ俺なんですね。
へ、殴られた恨みに本の山に埋めてやつたぜ。

「ふう、大丈夫みたいだな。しかし危なかつた、一般人に見つかる
とはまだまだ俺も甘い」

それにして、私事だからって気を抜き過ぎたな。しかも、仕事
着姿（忍装束）を見られるとば。

まあ全くバレて無いようで安心したし、世界樹についての本も手
に入れることができたからよしとする。

良く良く見れば、あの子達って楓と同じクラスだったような……
まあいつか、とりあえずは寮に戻るつ。

「“世界樹ノ全テ”、ね。なんかそんままのタイトルだな、オイ」
なになに？

『世界樹とは、学園の中央に聳え立つ、正式名称“神木・蟠桃”^{はんとう}の
こと。

樹高270mといつ世界に類を見ない巨木なんです。』

「世界に類を見ない巨木、ね。そんなのここに来るまで見たことも聞いたことも無かつたのはなんですかね？」

そりに読み進める。

『その正体はなんと魔法の樹だつたりするわけです。22年に一度の周期で木に蓄積された魔力は最大となり、世界樹を中心とした6箇所に強力な魔力溜まりを形成。この魔力溜まりが作用し、世界征服とか、億万長者になりたいという、即物的な願いは叶わないんですが、周囲に居る人の心に作用し、その願いを叶えてしまつという力を持っているんですよ。怖いですねー？』

「心に作用して、願いを叶える?...どういう意味だ?」

『そして、次に世界樹の力が發揮されるのは再来年。世界樹伝説つて知つてますか?』

世界樹の力が發揮される日が学園祭の最終日にあたるため、学園祭の最終日に世界樹の下で告白をすると必ず成功するという都市伝説があるんですよ。というわけで、気になるあの子に告白するなら3年後がチャンスですよ?』

さつきから思つてたけど、この本やたらだけた書き方してあるな。どんなヤツが書いたのか見てみたいわ。そんな感想を抱きページを捲ると……

『まあそんなこんなで、世界樹について書き記しちゃいましたけど、実はこれって禁書相当の内容なんですね。なので』

「なので、ここまで読んだら爆発するようここで細工しておきます。こういうの、一度やってみたかつたんですね。By・食つ寝る・3ダース? つて、この本光つて! ?」

そこまで読むと、“世界樹ノ全テ”が光を放ち始め

「つて、こんな場所で爆発したら俺以外にも被害が……やらせるかあああ!」

窓を開け放ち、本を振りかぶった俺は空に向かって全力投球。そして

『ドーン! パーン!』

と、気の抜けた爆発音と共に空に描かれる刹那の芸術。

「つて、花火かよ!」

そりや、確かに爆発は爆発かもわからんが。ちゅーか、禁書相当とかいうなり、あんな誰でも見つけられそうな場所に置いとくんじやねえよ。

ちつ、俺をペビアせてくれたお返しは必ずしてくれんぞつ、食つ寝る3ダース!

どこからか、

『フフフ、たのしみですねえ』

とかいつ声が聞こえた気がした。

2001年6月某日

中間テストも終わり、その結果に一喜一憂する間もなく、麻帆良祭への準備が始まった。

「ついで、20日で足りるのかね？」

「我が3 Bは、先ほどの帰りのホームルームにて、休憩所を作ることが正式決定した。」

「知らないの？休憩所は人気の出し物なんだよ」

とは、俺の前の席に座る、3 Bの麻帆良祭実行委員かつ、クラス委員長でもある佐藤の言葉である。

休憩所が出し物かどうかは置いておくとして、せつくり言つて、置きを教室に敷き詰めるだけ。

「これなら準備にも時間がかかるない上に、当番も置く必要が無いから、クラス全員が遊びに行けるってカラクリなんだよね～」

「だそうだ。」

「なんでも、麻帆良祭男子中等部に伝わる伝統の出し物らしい。」

「麻帆良祭って、学園祭みたいなもんなんだろう？」の学園規模でやるなら、相当なもんが出来そうだな。で、どんなのがあるんだ？」

麻帆良祭について、麻帆良 Wikipedia で調べてみた。

Wiki曰わく、

『麻帆良学園における学園祭の名称。

毎年6月に3日間かけて開催される。

麻帆良学園都市内の学術機関が総力をあげて催す、学園都市としては世界的にも有数規模の超特大イベントであり、営利活動を許可された生徒達が激しい商業化を押し進めた結果、延べ入場者数約40万人にも上る一大テーマパークの様相を呈すようになっている。』

らしい。

でも、具体的に何をやるかまでは書いて無かつたのだ。
転入してきた俺は、その辺りが全く無知なのである。

「ミスコンとか、ライブ……あと、『まほら格闘大会』だね！今年は、我が中武研部長の古菲ちゃんが出るから見ものなんだ！」

「我が？ 佐藤って、中武研だったのか？」

あ、ちなみに俺は水泳部に入った。何故、水泳部かつて？ 愚問だね、そこに水着があるからや。

「おう、ジャッキーに憧れてね！ あと……強いと女の子にモテそうじゃない？」

俺は佐藤を生暖かい目で見守りながら、

「少し照れくさそうにしながら話す佐藤を見て、こいつキメヒと思つたものの、哀れだつたので心中に閉まつ「出てますから！」しつかり聞こえますから…」ておくことにした

「この人、何事も無かつたかのように言い切りましたよ！？」

まつたく騒がしい奴だ。いくら佐藤が強くなつとも、

「1Jの年の女の子ってのは、顔に騙されてコロッといつまつもんのさ。でも、こんな事実は色々と可哀想な佐藤には黙つ「ちゃんと、聞こえますからねえ！？」ておぐのが良いだろ？と思つた俺は、それを口に出すことはなかつた

「そんな事実は知りたく無かつたよ！」

俺はなんて友達思いなんだろうか。佐藤も、感動の涙で前が見えないに違ひない。

「あんたには言われたくねえよー見た目完全にアウトだろー特に、その牛乳ビンの底みたいな眼鏡！」

ふ、甘いぜ佐藤。

確かに今の俺は、ギャルゲ主人公みたいに目の辺りが前髪で隠れて見えない+ぐるぐる眼鏡（伊達）をかけているがな、それは仮の姿よ。

その気になれば、彼女の1人や2人出来るんだぜー多分な……出来るよね？ね？

あー、ごほんごほん……それにぐるぐる眼鏡は、お隣を陰からマモル感じの忍者も愛用の品なんだぞ、馬鹿にするんじゃない。

「つーわけで、俺は佐藤よりマシなんだよ

「いや、どういうわけだよ

「じゃあ俺は水泳部の方に行くから

「あ、ああ、また明日。つて、僕の突っ込みはスルーですか！？」

水着姿の女子高生＆女子中学生が俺を待っているのだ、お前なんぞに構つていい暇はないのだ佐藤よ。

麻帆良祭当田。

『ちょっと、そこの兄ちゃん天津まだー？』
『俺の肉まんセットまだ来て無いぞ！』
『すいません、注文いいですかー？』
「あーはい！ ただいまお持ちしますー。」

何故か、中華屋台にてウエイターをやつていた

水泳部は特に出し物という出し物をする事は無く、まるで派遣社員のように各部に貸し出されるそうだ。
この、貸し出しによる人件費が、来年度の水泳部部費にあてられるらしい。

そんなわけで、例に洩れず俺もしつかり派遣社員の一人と化しこき使われことになつたわけなのだが……

「なんでこんなに客が多いんだ！」

今年度開店したばかりで客は少なく、楽が出来るだりつと思つてこの店を派遣先に選んだというのに、とんだ計算違いである。

今だつて、展開しているテーブルの数じゃ足りず、席に着いて注文出来るまで1時間待ちだとか。

「「んなはずでは……」

「只野先輩、ボヤく隙があつたら動いて「わかつてゐつて！」

俺と同じく派遣されてきた後輩の声に急かされ、出来上がつた料理を取りに行こうと振り向き、

『ドンシ』

「つまつ

「せやつ

一緒に派遣された後輩 水泳部期待のヒース（スタイル的な意味でも）、大河内アキラにぶつかつた。

「うわ、大丈夫か？」

「大丈夫。先輩、もう少し気をつけて」

「「」、「めん」

「頑張つて、先輩なら落ち着けばちやんと出来る」

「はい……」

何故か、『中一のガキに説教されるとか、俺の立場がねえだろー』と突つ込む気にもならず、言われるがままに大人しく頷いてしまつた。

なんだこの全てを包み込むような包容力。こいつ……出来る！

「ププ、アキラより年上なのにシノブは情けないアル
「全くネ。そのトロや、とても楓の兄とは思えないヨ」
「ぐ、ほつとけ」
「クー、超さん。そういう言い方は良くない。先輩はやれば出来る
子」

「やれば出来る子で」

後輩に、やれば出来る子扱いされるとか悲しい過ぎる。
つーか、超はなんで俺が楓の義兄だと知ってるんだ。

「楓に聞いたヨ」

「そうかい。ついでにお願いなんだが、人の地の文読むのはやめて
くれませんかね？オーナー」

「しっかり働けば、そんなことしないと誓うネ」

「ちゃんと働いてるってのーさっきのはアレだ、ちょっと虚しくな
つただけだ」

そう、なんで俺ウェイターなんかしてるんだひつと思つただけさ。
しかも、自分の懐に入らないお金のために。

あ、そうか。忍者なんだから、影分身で影の方にやらせれば俺遊
べるじやん……って、あれ？なんで、古菲と大河内の2人は俺を見
て固まってるんだ？まさか、今の口に出しちまつたとか？

いい歳こいて、自分のことを忍者とか思い込んでる危ない人とか
思われちゃつたりしたんじや

「長瀬（楓）のお兄さん（アルカ）！？」

「はい、呼んだかね？」

「誰が？」

「俺が」

「誰のアル？」

「だから、楓の」

「嘘だ（アル）！」

カナカナカナカナ……って、なんだこいつら。

「だつて先輩と長瀬は似てないじゃないか」

「そうネ、楓の方がシノブより背も高いアルヨ！」

「待て、大河内はともかく、古菲は喧嘩売つてんのか？」

楓より背が低いことは密かに気にしてゐるのに、遠慮無くえぐりやがつて！少し傷ついたぞこの野郎め。あ、女だから野郎じゃないか。

「喧嘩？ 望むところアルヨ！ さあ、構えるネ！」

「無理だよ、古菲は凄く強いんだ。水泳部のくせに、毎日水着姿の女子を、いやらしい視線で眺めてばかりでプールに入らない先輩が適う相手じゃない」

「クーもアキラサンも、人の家庭事情について詳しく聞くのは良くないヨ。それに、戸籍上は確かに楓の兄となつていたネ」

「だつー、もう！俺のことはいいからお前ら仕事しろよ！ つーか、超。お前何調べてんだよ！」

大河内がさり気なく嫌味か抗議っぽいことを言つて来た気がするが、そこは華麗にスルー。

気疲れした俺は、先ほど思いついた通り、こつそり影分身と入れ替わつて抜け出したのだった。

「さて、どこに行こうかな?」

楓は散歩部とかいう、ただ散歩するだけの部活に入ったと言つたな。

『あとで散歩部見に行くから、どこに行けばいいか教えてくれ』
つと、楓にメールを送信。

昼飯はさつきの派遣先でつまんだからいいとして ん?

ベンチに腰掛け、一人黄雀ている少女を発見。しかもあれは楓と同じ麻帆良女子中の制服。

ぶつぶつ呟いて見た目とても怪しいのだが、なんだか興味が湧いたので観察してみることにした。

しかし、この子さつきから何を呟いてんだろうか?
もう少し近づいて、聞き耳を立ててみるか。

「……えない、あり得ない、あり得ない、あり得ない、あり得ない、
あり得な(「」)

うん、アレだ。関わっちゃいけないタイプの人でした
けどこの子、最近どこかで見たような?なんだつたかな、確か携帯を弄つてる時に見たような記憶が……あれは確か、

「そうだ、ちうだ!」

思い出せた喜びから、おもわず近寄っていたのも忘れて声に出してしまった。

すつげーイタい感じの子かと思こきや、といじりじり毒を吐いてたりして、なかなか面白いことを書く奴だったから珍しく覚えてたんだ。

確かネットアイドルだけ?とか思い出してる時だつた。

突然置かれた手が俺の肩をガツチリ掴み、

「ちょっとこっちに来い!」

「痛つ、そこ痛いつ」

思わず怯んでしまつ程の鬼気迫る“ちう”の迫力に、俺は有無を言わざず路地に連れ込まれる。

“ちう”は、人目が無いか確認すると、俺を壁に叩きつけ、

「あんな大勢の人前で、なんてこと言つてくれてんだ!しかも指までさしやがつて!」

「あれ?指差してたつけ」

「めっちゃくちゃ、をしてただろ!うがー!」

「そりかすまん」

無意識にやつてたんだな、それは悪いことをした。
だけど、ちうはその返答が気に入らなかつたらしく、

「『すまん』、じゃねえ!あー、クソつー思わず反応しちまつたけど無視すりや誤魔化せたんじゃねーか?」

「そうかもね」

「あああー不意打ちだつたから思わず素が出ちまつた」

両手で頭をガシガシとかきながら、一人地団駄を踏むむづづ。
しかしあれだな。こいつやつて見ると、

「メガネの方が可愛いね」

「はー? ンなわけないだろーが! 写真は画像修正に手間掛けてんだぞ、写真のが綺麗に決まつてんだよ!」

「メガネをかけるだけで可愛さ3割増しだ」

「聞いてねーよ! それに、お前みたいな奴に言われても嬉しく無いつての」

あれ?俺の恋愛経験では、ここで好感度が上がるはずなんだが。
まあ、中学生の好感度が上がつたところで全く嬉しく無いんだけど
も。

そんなことよ、

「さつさつ、『あり得ない』を連呼してたけど、何かあつたのか? これも何かの縁、俺が聞いてあげようじやないか」

「き、聞いてたのかよ……ふん、別になんてことはねえ。ついでに、お前に話すほど仲良くなー。私と会つたことは忘れろ、以上。じやーな」

「話してくれないと、色々な所にバラしちゃうだ。長谷川千鶴さん
言つだけ言つて、ひらひらと手を振りながら去つていぐ“ちびつ”。
しかし、ネットアイドルのリアル事情なんていう、暇潰しにはち
ょうど良さげなネタを手放す訳も無く、

「話してくれないと、色々な所にバラしちゃうだ。長谷川千鶴さん

「なつー。」

さすがに聞き流せ無かつたのか、動きが固まる。

「えーと、1 A出席番号25、学籍番号は……」

「え？ な、なんでお前が私の生徒手帳を持つてやがるー」

「企業秘密でーす」

「ちよろつと、スッただけです。もちろん返すつもりでしたよ？」

「なんで、カードなのに生徒手帳つていうんだらうね？」

「知らねー！返せ！」

「あ、1 Aつて楓と同じクラスじゃん。どんだけ、俺はこのクラスに縁があるんだよ」

今日だけで、大河内、超、古菲。そして、ちつこと長谷川。それが聞こえたのか、訝しげな表情になる長谷川さん。

「楓？ 長瀬のことか？ お前も、ウチの変人の仲間かよ……」

「変人の仲間かどうかはともかく、楓の兄のシノブです。忍と書いてシノブ。よろしく！」

「シノブだあ？ アンタならどれだけ忍者好きなん……って、アンタ長瀬の兄貴かよ！」

失礼な。この名前は、忍者になる前からなんだよ。

お前からアンタに変わったのは年上だとわかつたからか？ なかなか殊勝な奴だ。相変わらず言葉遣いは悪いけど。

「それは置いといて、ほらやつきの話してみ？」

「ちつ……そのかわり話したらそれ返せよ、あと絶対私のことは喋んな！ 絶対な！」

そう言つと、長谷川は不機嫌を丸出しで渋々語り始めた。

「 つて、わけだ。ほら、ちゃんと話したんだから約束は守れよ
な」

「驚いたな……」

長谷川が語ったのは、この学園の異常をについてだつた。
小学生の時からおかしいと思つていて、それが今年になつて限
界を迎えたのだとか。

下は幼稚園児みたいなのから、上は人妻みたいなのに加え、留学
生の異様な多さに果ては口ボット。
特異な奴らをわざと集めたとしか思えないこと。

「あ?」

「まさか、俺以外にこの異常を異常だと認識してる奴がいるとは思
わなかつた」

「へ? んじや、アンタも……?」

「この異常をに気づいてる俺の方が浮いてるみたいになつてた」
「だよなー!」の学園おかしいよな!」

よつやく同志を見つけた喜びからか、俺の両肩を掴んで激しく搖
わぶる長谷川。

「ついついと田の端に涙を浮かべている辺り、本当に嬉しいのだろう
とこいつことが察せられる。

「良かった、この学園でまともなのは私だけだと思ってたぜ」
「え、ああ、うん。そうだ、まとも仲間つてことでアド交換しよう

よ。たまにはまともな人間と話さないと、頭がおかしくなつやうでね

「ああ、別にいいけど」

長谷川（中一）のメルアドゲットだぜー。あれ？俺の携帯、年下しか登録されてないような……

それにしても、『 だ、ぴょーん 』なんて痛いキャラ作って、ネットアイドルやつてる奴も充分まともは無い気がするが、これは突つ込み待ちなんだろうか？

いや、あれは趣味の範疇に入るのか？
だとすれば特別、変人というわけでも

「携帯鳴つてねーか？」

「本當だ、楓からか。ちょっと電話出でいい？」

「別にいいけど」

好きにじると言つよ、手をひらひらわせる長谷川。

そんな素つ氣ない態度をとりつつも、生徒手張もちゃんと返した
からもう用は無いはずなのに、電話が終わるのを待つてくれるよつ
だ。

「悪いね、んじゃ失礼して。もしもし、楓」

電話を取ると、もう何度となく聞き慣れた、少し抜けた感じの声
が聞こえてきた。

『 あいあい。メール見たで『 ジゼル 』よ、散歩部に来るとか？』

『 うん、そう。せつち覗きに行こうかと思つて 』

『 しかし、ただ拙者達と散歩するだけで『 ジゼル 』が……今はどこの
で『 ジゼル 』か？』

「それはまた名前通りな……今?えーと、シリルは
どういへんだ

「ライブハウス近くの噴水広場の辺りだ。散歩部ならわかると思う
ぜ」

長谷川に向かって首を傾げると、一面倒臭そうな素振りを見せながらも、すぐに答えを返してくれた。

実は素直じやないだけで、根は良い子なのかも知れない。口は悪
いけど。

「さんきゅ、今はライブハウス近くの噴水広『今のは誰で』」
え?今?さつき知り合った女の子で、お前と同
場

「ジフランツの「一九〇〇年」

「もう終わったのか？」

「ふーん。アソタは二ヶ所切れた」

「俺？俺はそろそ
ツ！？」

なんだ、このペレッシュヤーはー

遠くからなのに、俺にのみ放たれるという高度な殺氣の放ち方といい、フレッシャーの重さといい並大抵の相手では無い。そして、どこか懐かしさを覚えるようなこのフレッシャー。

「どうしたんだ？ 急に黙りやがつて」

「はあ？ 何言つてんだ、アンタ

呆れ顔の長谷川を無視し、プレッシャーを感じて後ろを振り返る
とそこには、

「見つけたで、」ゼロ

奴がいた。

いつの間にか現れた、忍装束の長瀬に連れられ、一瞬にして姿を消したシノブ。

「なんだつたんだありや。まさか本当に忍者？ありえねー」

先ほどの長瀬の姿を思い浮かべて、タラリと冷や汗が流れる。

「まあ、長瀬は寮に居る時もたまにあの格好で居るの見かけるし」

だが、長瀬が忍者だとしたら、あんなに分かり易い格好をするか？忍者ってのは、もつと「ひひ密ひつーか、なんつーか。とにかく、長瀬みたいにバレバレ過ぎる忍者なんて居るわけが……いや、この考えが長瀬の狙いだとしたら？

本当の忍者が、いかにも『私は忍者ですよー』って、格好してたら、信じる奴なんてそういういねーだろ。いねーよな？
とすると……

「あー、クソ！考えたって仕方ねえ、適当に向か買つて寮に帰るか
ひひ密ひつーか、『ひひ』になつて発散するこ
限るぜ。」

「おや、既に知り合いでたある力。麻帆良祭の間、彼には水泳部か
あ、テイクアウトもあるみたいだしここでいいか。

「いらっしゃいネ、何にするある力？」

「肉まんを3つ。つて、超かよ」

「おや、誰かと思えば長谷川サンではない力」

超包子の屋台で貰い物をしようとした私を出迎えたのは、クラスメイトである超鈴音だつた。

「はい、うちの肉まんは美味しいある!!。360円ネ」

「ああ、結構安いんだな」

「毎度ありネ。おかげさまで、あの通りテーブル席は埋まるネ」

肉まんを受け取り、超のいかにもなチャイナ口調を聞き流しテーブル席の方を見ると、確かに満席状態でウェイターもウェイタレスも忙しく動いている。

そして、その中の1人に私の視線は固定された。

「あ、おいーアイツつて」

「あの人、パツとしないが、実は楓のお義兄さんある!!」

「知ってる、さつき本人から聞いたしな。でも、なんでアイツがここに居る?」

あの高くも低くも無い身長、太つているわけでも瘦せているわけでもなく、ぐるぐる眼鏡に、どつかのギャルゲーの主人公みたいな髪型の男。

どう見ても、先ほど居なくなつたシノブだつた。

「おや、既に知り合いでたある力。麻帆良祭の間、彼には水泳部か

らの派遣部員として、朝からウチで働いて貰つてるね

「朝から……？ずっとか？」

「ずっとね」

ずっと？そんなはずはねえ、現にさつき私は会つたばつがだぞ。その証拠にシノブのアドレスはしっかりと携帯に登録されてる。

「アッシュ、双子だつたり兄貴が弟はいたりすんのか？」

「フフ、長谷川サンは彼のことが気になるのかナ？」

「んなわけねえだろうが！」

「照れなくてもいいね、兄弟は楓しか居ないハズ。この前調べたから間違いないヨ」

「調べた、つて……何してんだ」

「フフ」

一ツコリと不気味に微笑むだけで、何も言わない所が怖い。

だが、この超鈴音が言つのなら間違いないんだろう。つーと、さつき私が会つたアッシュは。

「生き靈？……はは、頭痛くなつてきた」

「へー、散歩部って意外と部員いるんだな。伊達に部では無いってことか」

「そうだよー」

「そりですー」

長谷川と喋っている途中に楓に攫われ、理不尽な暴力を受けたのが1時間ほど前のこと。

俺は、楓と双子の4人で、散歩部の散歩コースなるものを巡っていた。

ちんまい体で、一生懸命散歩部の活動内容を説明してくれる双子の様子は微笑ましく、兄弟の居なかつた俺は兄のような気分だつた。え?妹なら楓がいるじゃないかつて?あれは、ダメだ。あいつは俺を兄として慕ってくれないからね。

「しのぶ兄は、何の部活にはいつてるですか?」

尋ねて来たのは史伽。双子の妹の方で、大人しい子である。

「俺は水泳部だよ」

「えー? なんで水泳部? あ、わかつた。女子の水着姿を見るためでしょーー」

「ハハハ、バカダナア。ソンナコトアルワケナイジャナイデスカ」

「シノブ、棒読みになつてるでござるよ」

「やつぱりね! ひと目見た時から、しのぶ兄はそんな感じだと思つてたんだよねー。なんていうの? ムツツリ?」

「うちの、俺の本性をひと目で見抜いたらしいのは姉の風香。

見分け方は、やんちゃツインテが姉。大人しいお団子が妹といった感じ。

2人は楓のことを、『かえで姉』と呼んでいた。楓の義兄である俺は、自動的に『しのぶ兄』といつ呼び名で呼ばれることがなったわけだ。

お返しとばかりに、姉の方を鳴滝（強）、妹の方を鳴滝（弱）と呼んだら2人にキレられたので、捻ることなく名前で呼ぶことにした。結構自信があった呼び名なだけに、却下された時は驚愕を禁じ得なかつた、とかいうのはビリでもいい話である。

「お、お姉ちゃん失礼です～」
「そうだぞ、失礼だぞ！」
「え？ だつて史伽だつて、同じこと言つてたじやん」
「そんなこと言つてないですよーー！」
「酷いなあ史伽」
「え？ えええ？ 嘘ですつ、お姉ちゃんの嘘ですーー！」
「史伽まで、風香と同じこと思つてたなんて……絶望したつーー！」
「わーん、かえで姉ーーしのぶ兄が史伽のこと信じてくれないですーー！」
「ひらひら、イジメはいかんぞ！」

涙目になつた史伽が、俺と風香から隠れるよつてに楓に抱きつき、その史伽を二コ二コしながら撫で、俺たちを諫める楓。そんなほのぼのした風景が、そこにはあつた。

それからしばらしくして、

「お腹減つたー」

「やつしょば、私もお腹減ったです」

「む、拙者もでじやれるよ」

『氣づけば時間は、もうすぐ一九時ところとなり。晩飯を食べてもおかしくは無い時間だ。』

「んー、じゃあどうかで食べるか?」

「もちろん、しのぶ兄が奢ってくれるんだよね?」

「お姉ちゃん!」

「シノブは結構稼いでるみたいでじやれるから、遠慮はこらなこでじやれるよ」

「おこ、奢るのはどうかじゃないが、お前が決めるなよ楓

「気にしたらい負けでじやれる」

「えっとねー、じゃあ何処がいいかなあ?」

「お姉ちゃん、最近出来たばかりのあの店はどうかな?」

「ああ、あそこねー!」

そして、俺と楓が連れて来られたのが

「……超包子?」

「いいは確か、超の店だったでじやれるな」

「だよー!」

「他にも、クーとか四葉さんとかもいるですよ」

「ん、どうじたでじやれるかシノブ?顔が変でじやれるよ」

「違うよ、かえで姉。それをいつなら、顔がおかしい。だよ」

「それを直つなら顔色だよお姉ちゃん……でも、本当にじやつしたですか?」

顔がおかしこのは、ほつとこてくれ風香。そしてありがとう史伽、

お前が唯一の良心だ。

それにしても困った。テーブル席では、今も俺の分身体がせつせと働いているはず。

バレない内にどうにか

「あれ？ あそこにいるのって」

「しのぶ兄がもう一人、です？」

「ハハハ」

隠す間もなくまさかの即バレ。

2人を手刀で気絶させて、寮に戻せば夢だったことにならないかな？ よし、そうしよう。

忍者つてことが一般人にバレちゃマズいんだ。すまん、風香、史伽。

「何をするつもりで『ざるか？』

「放せい、バレるわけにはいかんのだ」

手刀を放とうとした瞬間、その手を楓に止められる。俺は小声で楓に抗議するが、

「大丈夫で『ざるよ』

「何がだ！」

「2人には拙者が忍者だとバレてるで『ざるから』

「ああ、なんだ。それなら問題ないな……って、問題あり過ぎだろうー。どういうことだ」

聞くと、忍装束を着ている楓を見た2人はそれだけで楓のことを忍者だと思った（間違ってはいない）ようで、たまに分身の術を見せては遊んだりしているらしい。ただし、3人だけの秘密というこ

とで。

バレてるってどうこうことだとか思つたけど、私服が忍装束の楓にそれ言つてもいまさらなのか？

そんな事に頭を悩ませてると、楓は続けて言つた。

「なに、子どもがサンタさんを信じてゐるよつなものでござる。 1 人や2人にバレたところで、周りは信用せぬよ」

「お前何気に酷いな」

「はて、なんのことござるかな？」

「こんなことを言つてゐるけど、楓の2人に對する信用からくる言葉なんだろ？、多分。

そんなこんなで、結局場所を変えた俺たちは近場のファミレスに。

「やつぱりしおぶ兄もかえで姉みたいに忍者だつたんだ！」

「凄いですー！」

「内緒で頼むよ」

「大丈夫。2人は黙つてござるよ

「うんうん、その代わり」

「デザートも付けて欲しいです 」

「はいはい、わかつてゐよ。今日は好きなだけ食べな

デザートくらいで、口封じ出来るなら安いというも。

頼んだ料理が来るまでの間、俺たちは雑談をしていた。もつとも、話しているのは双子と楓だけで俺は聞き専だつたけど。

“女三人寄れば姦しい”という諺があるが やれ、どこのスイーツは美味しいだの、どんな服が流行つてゐだの、出会いが少ないだの、良く話題が尽きない。

料理が運ばれて來ても、食べながらずっと喋つてゐるのである。

まあ楓は姦しいという程ではなく、相づちうつたり話しお振られた

ら応える程度だつたけど。

「ねえねえ、しのぶ兄とかえで姉つて血が繋がつてないんじょ？
なんで？」

「んー、それは拙者とシノブの2人だけの秘密だ」さるるよ
「えー、いいじゃん教えてよー」

「そういうのを無理に聞くのはよくないよお姉ちゃん」

さすが史伽、風香と違つてプライバシーといつ言葉の意味を理解
している。

しかし史伽に窘められた程度で風香が諦めるわけもなく。

「だつてさー、史伽は気になんないの？」

「気になるけど……」

「別に教えてもいいけどつまんないよ？」

楓は2人の秘密とは言つてるけど、実際はそれほど秘密とこいつ
ともない。

つい先日も、桜咲の追求を逃れられず（鬱陶しくなつたからとも
言つ）に教えてしまつたし、他にも学園長あたりなら知つてゐると思
う。

あ、超も知つてそうだな。戸籍がどうのこいつの言つてたし、それ
にしても俺の戸籍は誰がいつ書き換えたんだろうか？里長がやつて
くれたのかな つて、話がそれ過ぎたな。風香が頬を膨らませテ
ーブルを叩いて催促していく。

「俺が10歳の時に親に捨てられて、それを拾つてくれたのが楓の
親だつたんだよ。んで、養子にしてくれたのさ」

といつのは設定で、本当はなんだかわからん間に異世界の日本に

飛ばされて、楓（8歳）に拾わた、なんて痛々しくて恥ずかしくて言えない。

「へー、そうだったんだ。結構ハードな人生なんだあ

「子どもを捨てるなんて許せないです」

「これも人にベラベラ話すことじゃないから内緒な

スイーツが運ばれて来たので一端口をつむぐ。楓は何故か不満そうだったけど、特に何も言いつもりは無さそうだった。

父ちゃん、母ちゃん、勝手に酷い親にしてすまん。本当は普通に育ててくれた両親だと思つてゐる。

「でもむー、なんで名字が違うの？」

「あ、そうです。養子になつたんなら、名字も長瀬になるんじゃ？」

「む、言われてみればそつぞうひざるな」

「それは……あれ？」

スプーンを動かしながら風呂、続いて史伽、さらには楓も疑問付をあげる。そして、答えようとして自らも回答につまる。

「こちらでの俺の扱い、つまりは戸籍やら何やらが不明だったのは置いておくとしても、養子となつてこるなら、少なくとも名字は変わるんじゃないだろうか。

今までも当然のように、『只野忍』と書類には書いていたけど、『たついた雰囲気がしたことはあつたがその後は何の問題もなく通つた。

「なんでだろ？ 里長が何かしたとか」

「養子になつたとしても、名字が絶対に変わるものではないのではざらんか？」

「そんなことあるのかな。まあ、不自由してないし別に問題無いじゃ

それに、あの里長なら何かやってても不思議じゃない。

なんたって、あの人は なんだか背中が寒くなってきたからこの話はやめよ。」

といふで、

「あ、これ美味しいーーー。」

「こっちもですかーーー！」

「あ、すまぬ。追加でこれとこれとこれ、あとこれも頼むでござる」

「お前、うはんだけ食べる氣だーーー！」

「――テザートは別腹でござる（だよ）（ですーーー）」

テーブルいっぱいに所狭しと並べられたスイーツの数々を見て俺は溜め息を吐いた。

お金、おろして来た方がいいかなあ……

2001年8月某日

夏休み。

俺は真面目に宿題を消化していた。

成績なんて気になくとも、エスカレーター式で進学出来るこの学園。

宿題ブツチして成績に影響しようともなんら問題は無い。そして挙げるなら、2学期に先生の小言 + 補習が待っているくらい。

とは言つても、日中は水着鑑賞くらいしかすることもないし、深夜になるまではバイトも無い、ゲームもやり飽きた。

ついでに言えば、2学期明けてから、わざわざ補習なんて受けるのも面倒だったので、無駄な時間を過ごすのも勿体ないということで宿題を消化していた。

「うと、これで全部終わり」

「この季節は陽が沈むのが遅いな、もう7時過ぎか。今日は警備の日だし、外で食べるのも悪くないな。その前に、と」
陽が沈んでいる所だった。

シャワーを浴び、忍装束を着込む。これの上から黒のTシャツに黒のジーンズに着替える。服をシュバッと投げ捨てる、いつの間にか着替え終わってるアレだ。実はこいついう地味な仕込みをしているのだ。

もしもこじないのかつて？それはどうにかなるんです、忍者だからね。

「う、あちい」

寮を出れば当然のように待ち構えている熱気。冷房の効いた空間に居ただけに余計に熱く感じる。早くも滲み始めた汗を腕で拭おうとして氣づく。

「あ、メガネ忘れた」

学校に行く時は常にかけているが、私用で外出する時はかけ忘れることがある。まあいい、メガネを掛けて無い時の弊害は、知り合いで会つても全く気付かれない、声を掛けられないことくらい。

「だと言つのに、何故キミにはバレるのかな？」

「フフ、天才だからカナ」

夕食に選んだのは超包子。麻帆良祭の口にこいで働いてからというものの、しおつちゅうこの店を利用していたりする。カウンター席に座り、料理を待つていて俺に声を掛けってきたのは、自称じや無く正真正銘の天才児である超鈴音。

何故かコイツ、そして大河内にはバレるから謎である。ちなみに大河内曰わく、『同じ気配だからすぐわかる』だとか。いつたいお前は何者なんだと小一時間問い合わせたい。

「働くなくていいの？」

「私はオーナーだからね。それに、今日は手伝つまど忙しくないヨ」

「ふーん、そんなもんか」「隣失礼するネ」

ר' יונתן בר' יונתן

それから超と麻帆良都市伝説やら麻帆良七不思議といつた、くだらない雑談しながら夕食を取つた。

「ふはー、食つた食つた。美味かつたよ！」

「それは良かった。でも、五月に直接言ひにやるとむつと喜ぶネ」「そうジジ、こじが俺ががんばらんよ。

卷之三

四葉にお礼を良い、財布から金を出して支払いを済ませ、超に別れを告げる。

気付けばもう2時。

あと1時間もすれば仕事の準備を始めなければいけないが、食後の運動にプールでひと泳ぎするのも悪く無い。

それに、この時間ならプールにはもう誰も残っていなかったので、シャワーを浴びたのにこの暑さでそれも無駄に。汗を流しておきたいというのもあって俺は屋内プールへと向かった。

「まだ来てない、か。珍しいこともあるものだ」

時刻はもうすぐ23時といつといふ。

いつもなら私より早く来ているはずのシノブさんの姿は無い。なんだかんだ言いながらしつかり仕事はする人だから、遅刻、ましてやサボることなどは無いとは思うが、何かあつたのだろうか。

「電話でも……ん、メールが来ているな。龍宮か？」

Form:

Sb: 桜咲刹那さまに重大なお知らせ

近衛木乃香さんはお預かりいたしました。

無事に返して欲しければ、下記の場所までお一人でお来し下さい。

場所は

「なん、だと……まさかー?」

私は走る。

これが悪質な悪戯の可能性だつてある、まずはこれが本当かどうかを確認しなければならない。

そうして向かった先は女子寮、目指すは643号室。このちや…
木乃香お嬢さま、そして相部屋の神楽坂さんが住む部屋。
部屋を訪ねて、そこにお嬢さまが居れば問題はない。しかし、もし居ないとすれば……そんな不安を抱えながら、私はノックやドアチャイムを押すというマナーを無視して蹴破るように643号室に踏み込んだ。

「木乃香お嬢さまー」

「え? ひょ？」

部屋を見回しても姿は見つからず、トイレにもお風呂にも気配はない。

「木乃香お嬢さまはどこですか！？」

「木乃香？木乃香なら1~9時くらいに電話がかかってきて、部屋から出て行つたけど……つていうか、いきなりなんなの？」

「くっ」

先ほどのメールの内容を思い出す。

『無事に返して欲しければ、下記の場所までお一人でお来し下さい。場所は』

そこに向かえば、お嬢さまは居るはずだ。誰がどのような思惑があつてこんなことをしたのかはわからないし興味も無い。

良いだろ？これが罠だろ？となんだろ？と、要求通り一人で向かってやる。

しかし、お嬢さまに指一本触れてみる。その時は生きていることを必ず後悔させてやる。

私は、指示のあつた場所に全力で向かいながら、そつ決意した。

「あつれー、電話通じ無いなあ。遅刻の言い訳しようと思つたのに

携帯電話をポケットにしまい、走るスピードを若干上げる。

普段泳がずに鑑賞に徹している分、久しぶりにプール入つたら無性に泳ぎたくなり、気付けば1時間経つていた。

更衣室のシャワーでさつと流してすぐに着替えるも、桜咲と待ち合わせしている時間は既に10分経過している。

「まあいいなあ、ガミガミ怒られそつだ

ちつちやいことは気にしないっていつ俺とは違つて、桜咲は真面目だ。あの歳であんなに頭堅くて疲れないのかね。

それにしても、と夜空を見上げる。

「今日は良いい満月だ」

夜も遅いといつのに外が明るいのは、街灯のお陰だけでは無いだろ。ひ。

こんな日なんだから、いつも通り何もあつませんよ。ひ。

「やついえ、超が言つてたな。学園都市伝説の一、『満月の夜に出る吸血鬼』だつけ

空に浮かぶ真ん丸お月様を見て思い出すのは、超が教えてくれた都市伝説の話。

なんでも、学園都市には満月の夜に黒いボロきれを纏つた吸血鬼が出るとか。

そういうえばあの時、超が妙なことを言つてたな。

『といつ、都市伝説がある』

『ふーん、満月の夜に出る吸血鬼ねえ。会つてみたいもんだ

『吸血鬼に会つて、いつたいどうするつもりネ?』

『どうつて……別に。そうだな、捕まえて見せ物にでもするとかどうだ?』

『ナルホド。でも、それがシノブに出来るカナ?』

『無理だなー。もし遭遇したら、しつぱん巻いて逃げ出すね。一田散
に

『それが良いネ。それでも、彼女はシノブに興味津々のよう
だからネ。捕まつたら何をされるかわからない』

『はは、怖い怖い。つっても所詮は都市伝説だしな』

『フフ、本当に伝説だと良いがネ』

思い返すと満載である。

「本当に居る可能性も無いんだよな。あの超が、意味あり気
に言うのも氣になるし」

もつとも、超が俺を怖がらせて、して“彼女”だと、 “吸血
鬼が俺に興味津々”だと、 真実味を持たせるように吹いた可能性
も否めないわけだが。

「ま、鬼があの程度だつたわけだし、もし吸血鬼が居たとしてもた
いしたことないしょ」

「ほう？ それは聞き捨てならんな。私をあの低級共と同列に扱うと
は良い度胸だ」

「いやいや、自分で言うのもなんだけど結構強いほうだと思……え
？」

？

声が降ってきたのは街灯の上。

そこには、満月を背負い黒い衣に身を包んだ

「どれほどのモノが見せてもらおうか、只野忍！」

金髪の少女が居た。

1-2話（前書き）

前回の投稿から1ヶ月以上経過。やるいとあってやんなりちやう。

そして、書き終わってみれば殆どまともに戦つてないといつて驚愕の事実。

感想とか貰えると励みになりますです。

あとがきに、1-2話裏　掲載

「どれほどのモノか見せてもらおうか、只野忍！」

どこで知ったか俺の名前を呼ぶのは、街灯の上に立つ黒い布を身に纏った金髪の少女。

それを確認した俺は、

「つて、反応しろ！」

華麗にスルーした。

だつて、なんか面倒くさい感じがしたから。

「桜咲出ないなー。怒つてるのかな」

「ふん、桜咲か。奴は来んぞ」

「メール入れとくか」

「人の話を聞けっ」

街灯から飛び降りながらのライダーキックを繰り出してくる少女、ヒラリとかわす俺。

「えーと、とりあえず……」

「話を聞け。さもないと、桜咲がどうなつても知らんぞ？」

「なんですかキミは？こんな時間に子どもが一人で外を出歩いてはいけないのですよ」

「ふん。ようやく話を聞く気になつたか」

「じゃ、注意はしましたからね。それでは」

シユタツと片手を上げて、じく自然にその場を立ち去

れなか

つた。

「馬鹿にしているのか貴様は！」

「つたく、なんだよ。用事があるなら手短に頼むよ」

「なあ」

少女が田の前まで歩いてくる。

「すぐ」

そして、俺の左手を手に取り、

「終わるぞ」

瞬間、俺は地に這つていた。

「おお？」

何が起つたのかは至極簡単。

左手を捻りあげられ、膝の裏に蹴りを入れられ膝カツクン状態になつたところに、腕の関節をキメられて地に這わされた、ただそれだけ。

だが、その『ただそれだけ』を知覚出来ない速度で行われた結果が

「今の俺の状態ってわけだ」

未だに地に這わされたまま、口の中に入った砂利をべっぴんと吐き出す。

「「」の程度も避けられんとは、期待外れだな」

少女は追い討ちをかけるよつて、後頭部を潰さんばかりの勢いで蹴りを落とした。

少女に押さえられていた『俺』が煙のように消滅、本体の俺は街灯の上に移動。

「何を期待してたか知らないけど、ちょっとと懲らしめてやんないとダメみたいだな」

「ほつ、いつ入れ替わった？ 気づかなかつたぞ」

とは言つたものの、よくよく覗ると、この少女、うつすらではあるが人間じや無い氣配を感じる。

となれば、学園外からの侵入者の線が濃厚だ。まさか、学園内に学園長みたいな、化け物がそう何人も居るわけじやあるまいしない、よね？

そうなると氣を張つてなかつたとはい、俺が侵入を感知出来ない程度にはテキる奴。という、あまり歓迎出来ない結果に行きつくなわけだ。

だが、

「どこかで見た氣がするんだよな」

「余所見をしている暇があるのか？」

「喰らうつかよつ、ぬあああああ！」

少女が放つ背後からの鋭い蹴りを左腕で受け、右手の螺旋丸を少女の横つ腹に撃ち込む。

「ぐつ……う」

回転しながら数メートル吹っ飛んだにも関わらず、ボロボロになつた少女が、ふらふらと立ち上がつた。

「翻と本氣でぶち込んだんだけど、それで立ち上がるってのはどういふことかね」

「クク……少しほやる気になつたようだな？」

口の端に滲ませた血を拭いながら、一やりと笑う金髪の少女。

「やる気になつたというか、やらざるを得なくなつたというか」

襲われた時の癖で、つい反射的に螺旋丸出しちゃうんだよ。
つていうか、キミ下着丸見え。いや、モロ出しなんですけど。あ
あ、俺のせいか。

「エリを見ているー。」

「口りに興味は無いんだが、しいて言うなら下着?」

黙れ、誰が口りだ！」

どこを見てるのか聞かれたから答えたのに黙れとか酷い。
それにどう見ても口りだし、事実を事実のまま言って何が……いや、なんでもないです。視線が痛いですっ。

「吸血鬼をナメおつて！ふざけた口を聞けなくしてやれ！」
「吸血鬼？ただのフランクが…………！」

自称吸血鬼の少女が、ボソッと何かを呑みながら放つてきたフラスコが弾けるやいなや、氷の礫となつて襲つてきた。

にも色々タイプがあるってことなのかな。

……
……
……
……

「ほら、まだまだ行くぞー！」

次々と液体の入ったフラスコを放つてくる吸血鬼。離れていると氷の礫が、近づくと受け流され組み伏せられる。

小太刀を出してはどつかに飛ばされ、分身を出しても各個撃破、氣弾を撃つてはペいつと手だけで弾かれる。

「はあはあ……」

「どうした？ 吸血鬼程度どうにか出来るんじゃなかつたのか？」

そう思つていた時期が俺にもありましたよ。あの量産型鬼と、この金髪吸血鬼どじやそれこそレベルが違つ。今の俺じや勝てる氣がしない。

「仕方無い。こうなつたらあの手を使つしかないか」「ほつ？ まだ何かあるのか。いいぞ、やつてみる」「言つてろーいくぞー」「

そして、最後の秘策を成功させるべく煙玉を地面に叩きつけた。

煙幕が晴れた先から出て来たのは4人の只野忍。全員が、氣を圧縮させたであろう氣弾を両手に構えている。

分身の完成度、身体能力の高さは評価は出来る。分身した上でソレを使えるのにも驚いた。が、

「馬鹿の一つ覚えだな」

「「「ただの馬鹿の一つ覚えかどうか、試してみるよ」「」」

「はっ、もとよりそのつもりだよ

4人の只野が一列となつて向かつてくる。さながら、ジョット

トリームアタックという感じに。

私は、魔法の媒介であるフラスコを前方に放つた。

「「「当たらないっての」「」」

「ふん。当たなかつたんだよ、ゴゾー」

計算通り避けさせる。隊列はさすがに崩れんか、まあいい。本命は……

「「「足つー?」「」」

ゴゾーが1発目を避けた先に向かつて、既に放つておいた魔法がドンピシャで発動。見事に足を取られた1人を、さらに魔法で追撃。直撃を喰らつたゴゾーは、煙のようになってしまった。

「氣弾を使う暇も無かつたな?」

残り3人も同じように、いたぶり分身の2人も消滅させる。残つた本体は満身創痍の姿で木々の中へ逃げ出した。

だがそれも続かない。体力が尽きたのか、ついに地面に崩れ落ちた只野忍。

「限界のようだな

「…………」

ボロボロの状態、まさに虫の息といつ奴だ。私としてはここまで痛めつける気は無かつたが、まあ仕方あるまい。

「では、貴様の血を頂こつか

「……お前、本当に吸血鬼なんだよな？」

「今更臆したのか？ そうさ、私は正真正銘の吸血鬼。それも、ただの吸血鬼ではない、吸血鬼の真祖だよ」

吸血鬼の真祖という言葉に、只野忍は再びを口を閉ざした。

ここ『麻帆良学園』で夜間警備をしている以上、裏の世界に関してそれなりに精通しているはずだ。ならば、吸血鬼の真祖が何を意味するか嫌でも理解出来るはず。

フフ、さらに脅かしてやるか。

「吸血鬼を侮つたことを今更後悔しても遅いぞゴゾー？ 貴様の血を吸い尽くしてやる」

まあ死なせる訳にもいかんしほびほびにはするがな。と心の中で付け足す。

そうして只野忍に馬乗りになり、一番美味しそうな首筋に顔を近づけ

「吸血鬼、ね。そうか、そうか。なら……」
「おこ、いりー貴様つ、ええい離さんか！」

そう叫ぶと、只野忍は私に組み付き、とこづか抱きついてきた。同時、それまであった地面が無くなる。完全に油断していた私は重力に引かれるまま落下し、そして

「これつ、落とし……馬鹿つ、あつ、あつ、アアアアアアアツ！」

秘策を成すべく、煙玉を地に叩きつけた俺は、それを田眩まじに即座に印を切つて分身を4体作り出し、気配を断つて戦線から離脱した。

「ふつ……どうにか誤魔化せるみたいだな。さて、と」

懐から携帯を取り出し、田当ての人物のダイヤルをプッシュ。すぐ電話は繋がった。

『もしもし』

「もしもし、学園長ですか？俺です、只野忍です」

『ほ、忍くんか。こんな時間にどうしたね、何かあったかの？』

何も無いのにこんな時間に学園長に電話する物好きなんて居ないだろ。とは、言わないでおく。

「はい。吸血鬼って、どうやって倒せばいいんでしょう? 忍者の俺でも出来そうな手段知りませんか?」

『吸血鬼? はて、なんでそんなことが知りたいんじゃ?』

「それが、警備中に自称吸血鬼に襲われまして」

『……もしかして、ちっこい金髪の吸血鬼かの?』

「ええ、まさか良くなっていますか?」

『(ヒヴァンジョンの奴何をやってあるんじゃ…………)』

「学園長?」

今何かぼそりと言わなかつたか? まさか、その吸血鬼の正体に心当たりでもあるのだろうか。

『いや、なんでも無いわい。そうじゃな、ワシの知り合いが実際に使ってみて効果が絶大だつた方法なのじゃが……』

「ふむふむ、ありがとうございます。それでは」

学園長が教えてくれたのは、さる高名な魔法使いが、悪名高い吸血鬼を仕留めた時に使つた罠とやらだつた。

教えて貰つておいてなんだが、その罠つて、魔法のママの時も魔法関係ねーじやねえかと思つたのは秘密である。

それはさておき、次は罠に使つ道具を用意しなければいけないわけだが、こんな時間に融通が効く人物と言えば……

『おや、こんな時間にどうしたね?』

「あ、オーナー?俺、忍だけど。急ぎでちょっとお願ひがあるんだ」

『フム、聞こうか?』

「至急、玉ねぎ50玉、ネギ50本、にんにく100個欲しいんだけど」

『ハ?』

「だから、玉ねぎ50玉、ネギ50本、にんにく100個欲しいんだけど」

『ウチは八百屋ではナイのだガネ……』

そんなことはわかつてゐる。でも、俺の知り合いで、緊急でひとつにしてくれそなのはコイツくらいなんだよな。

「そこのなんとか」

『……わかつたネ。その代わり代金とは別に貸してつアルヨ。』

「さんわゆー、じゃあ配達場所は……」

「これでオーケーだ。」

あとは学園長から教えて貰つたとおり、落とし穴を堀つてその中に玉ねぎ、ネギ、にんにくをぶち込み水を流し込む。あとは、地面を偽装して……なんだ?こんな時間に電話が掛かつてくるなんて、誰だり?。

「もしもし?」

『あー、私だ。長谷川』

珍しくもないか。最近良く掛かつてくるし。

「ちうか」

『だから、そう呼ぶなつて何度も言えばつ……』

「悪い悪い。で、何? 今ちょっと忙しいんだけど」

『つたく。忙しいならいにんだ、用件はいつもだったからよ。忙しい時に悪かつたな。じゃ』

ツーッツー……

また、自分のクラスの愚痴か。最近頻度が増えてきてるな、長谷

川の精神が心配だ。

それはさておき、やつと完成した！

「」の間、わずか一時間ちょっと、ジョバンニも顔負けの仕込みのスピードである。

なに？懲らしめるとか言つておいて、人に頬つたり、罠を使つたりするのは汚いって？

狡い、汚い、卑怯は忍者にとつては褒め言葉なんだ。気にしないで欲しい。

あとは、分身が罠まで誘導するのを待つて

.....

.....

.....

.....

「これつ、落とし……馬鹿つ、あつ、あつ、アアアアアアアツ！」

「いまだ分身体、螺旋丸で玉ねぎとネギでこんにくをミンチにするんだ！」

気分はボーモンマスター。以心伝心なので別に口に出して命令する必要は無かつたが、勢いというかノリというか。特に気にしないで欲しい。

分身体は、吸血鬼から手を離すと水面に向けて螺旋丸を発射、見事ミキサーに掛けた後任務を果たしたと言わんばかりに消滅した。

「ひつ、ひいい！臭つ、わぷつ、口に入つ」

「どうやら効果は抜群のようだな、吸血鬼！」

「ペッ、ペッ…やめッ、助け……卑怯つ、だぞ…」

だから、狡い、汚い、卑怯は裏め言葉だと言つたでしょ「う」。聞いてない？知らんがな。

ほーら、にんにくと玉ねぎをもつと増量してくれるわーちなみに、鼻栓してるので俺への被害は皆無だ。

「がつ、がぼ……だづづ……でつ」

「負けを認めるなら、助けてやらんことも無い」

「みじめるつーみじめ、ぬ、がら。はや……ぐつー」

吸血鬼とはい、見た目がまるつきり少女なのだから若干心は痛む。

息も絶え絶えな吸血鬼を落とし穴から引っ張り上げた時には、既に気絶していたらしく、学園長に連絡した俺は、逃げるように警備へと戻った。

だつて、近くに居たら服に臭いが移りそなだもん……

ひつして、麻帆良学園に来て初めての激闘（？）は幕を閉じた。 そう言えど、桜咲がどうのこうの言つて無かつたつけ？まあいつか、桜咲のことは給料に含まれてないもんね。

1-2話（後書き）

1-2話裏

指示された場所にあつたのは、木で出来た一軒の家。私は扉を蹴破るよつこにして、その家に踏み込んだ。

「お嬢様つ！」

「ほえ？ せつちゃん？」

「こんばんは、桜咲さん」

「良かった、ご無事で……それに、絡繆さん？」

どういう訳か、テーブルで向かい合い、呑氣に2人でトランプをしているお嬢様と絡繆さん。

「意外と、早かつたですね……」

「まさか、あなたがお嬢様を？ どうこいつ」とですか？ 事と次第によつては

「びつくりしたわーせつちゃん、どないしたん？」

「え、いや。その……」

絡繆さんに聞い詰めたいのに、お嬢様がいらっしゃるためにそれが出来ないつ。

そう私が歯噛みしていると、

「私がお呼びしたのです」

「茶々丸さんが？」

「はい、ですよね。桜咲さん」

「あ、や……ぐ、そ�です」

お嬢様が害されてる様子はなー、ここは絡繰さんの畠に令わせるべきか。

「くー、せっかやんと茶々丸さん仲良かつたんやねー

「はー」

「ど、といひで、お嬢様はこんなとこで何を?」

「ウチは、茶々丸さんに晩御飯に誘われて……あ、やつや。明日奈に連絡する忘れとつたわーちょっと、電話してくる~」

お嬢様が席を外された今がチャンスだ!

「申し訳ありません」

「まだ、何も言つていませんが……?」

「あのような方法が一番あなたを呼び出し易いと思いまして」

私を呼び出す? 私を呼び出して何をするつもりだったのか。

「一体何が目的なのですか?」

「目的はあなたでは無く……」

「では、やはりお嬢様をー!」

「いえ、それも違います」

警備担当の田中、私を呼び出し、その目的が私でもお嬢様でも無いといひひとは

「只野さん……?」

「お待たせー、今日は泊まるつて明日菜に言つてたわー。せつせんも泊まらんよね?」

お嬢様がもう戻ってきた、というかこんな怪しい所に泊まらせるよ？

「いや、私は…」

「はい、桜咲さんも泊まります」

「絡繆さん…？」

何を勝手に決めているのですか！

「良かつた～、今日は久しぶりにお話ししようつた～？」うちに来てからあんまお話し出来んかつたもんな～」

「で、でも」

「ほり、せつちゃんもこっち来て一緒にトランプしよ？」

ぐ、お嬢様をこんな場所に1人で泊まらせるわけにはいかないつ。これはやむを得なくです、仕方ないのです！だから今日だけ、今日だけ……

1-3話（前書き）

久しぶりに書いたら、短い上に超のキャラ、口調が怪しくなつてた。
且ついく箇所があれば教えて頂けると幸いです。

2001年10月某日

「今度、大格闘大会なるものがあるらしいでござる」

楓の口からそんな言葉を聞いた、とある土曜日の午後。午前で授業を終えた俺達は、久しぶりに2人で街に出た。その帰り、晩御飯にと超包子に寄つた時のことである。

「大格闘？ 何それ」

「なんでも、学園内の格闘技経験者達がかき集められて、優勝すると賞金100万円が貰えるとかなんとか」

「100万？ 100万か……ふふ、100万あればアレとコレと…
…ふふふ」

主に、新型のパソコンやらゲームやら、家電やら、欲しい物はいくらもある。

ちょっととした小金持になつたシノブの浪費癖は止まる所を知らない。

なに？ 每月100万近く稼いでるだろ？ それはそれ、これはこれ、だ。

お金はあつて困るものじゃない。

「しかし、何かしら格闘関連のサークルなり、部活なりに入つてないと参加資格は無い上、途中入部が可能なのは1学期までの間でござるから」

「参加出来ない、と？」

「うむ」

「そんな……せつかくのボーナスが

一般人コマして、100万という美味しい話しが転がってるのに、
参加資格が無いという事実に絶望していたそんな時。
背後から声が降ってきた。

「フフフ、ジワジワ困つのよつだネ！」

「オーナー？」

知る人ぞ知る、麻帆良学園始まって以来の天才、怪しい中国人？
こと、超鈴音だった。

つて、待てよ。気配感じなかつたぞ？

「超、ジワしたでござるか」

楓も気配を感じ取れなかつたためか、若干警戒気味。その証拠に
いつもより目が細いや、なんでも無いですよ楓さん。だから、
テーブルの下で足を踏むのはヤメテ下をいいいい！

「ドウやら、大格闘大会に出たいみたいだネ。で、シノブはどうし
たのカナ？様子がおかしいガ」

「なんでも無いでござるよ超。な？」

「はひ、楓さんの言つとおりでござるますですよー。」

楓の、のほほんとした顔（の裏に隠された忍としての本性）を見
慣れている俺はつい条件反射という名の本能で肯定。

「？まあいいが、大格闘大会に出たいのダネ？」

「待て待て。ナチュラルに会話に入つてこよつとしてるけど、さつ
きまでこの場に居ませんでしたよね！？」

人の話しを盗み聞きでもしてたのかお前は」

「失礼ナ、偶然通りがかつただけヨ。聞きオボえのある声がしたと思つてネ。それに、今はまだ盗聴器のスイッチは切つているヨ」
「なんだ、そつかー。つて、普通にスルーしそうになつたけど、今は、つてなんだよ今は、つて！」

まるで、本当に盗聴器仕掛けで、え、マジで？

「…………（＝口＝口）」

「…………」

「…………」

よし、俺は何も聞かなかつたそういうことにした。楓も異論は無いようだ。

「で、格闘大会に出る手段があるのか？」

「聞いて驚くがイイ！」

ムンッ、と無い胸を張る超は高らかに言い放つた。

「入部出来ナイなら、作ればいいネ！」

そう高らかに宣言した彼女の腕には、【おーなー】と書かれた腕章が輝いていた。

そんな話しが、してたのが一週間前。

そして今。

俺は割れんばかりの歓声に包まれる舞台上に立っていた。

気のせいか帰れコールも混じっている気がするが、そんなことは瑣事。所謂、気いたら負けというアレ。

黒地に、【現代忍術研究部】と書かれたロングのTシャツに、ジーンズ。

それと、顔を隠すための覆面をついている。祭りとかの出店で売っている仮面みたいな奴だ。

『さあ、ついにこの大格闘大会もこれが最終試合となってしまった!』

舞台上に上がってきた司会の少女が、さりげなく盛り上げるために改めて対戦者の紹介を始める。

『学園内の、並みいる腕白慢達を真つ正面からバッタバッタとなぎ倒してきた、中武研の若き部長、古菲選手!本当に中学生なのか!?

「ほつとくアル!」

『対するは、驚くべきことに対戦相手がことごとく辞退したため、ここまで不戦勝で勝ち進んできた、正体も実力も不明のダークホース忍研のハットリ(仮)選手!その仮面はウケを狙つてるのか!?

すべつてるぞ!』

「ひぬせー、ハットリくん馬鹿にすんな!」

忍者と言つたら、ハットリくんだろうが。もしくは、つざまいたり、たまじだつたり。

司会も、会場がヒートアップして来たのを感じ取ったのか、口上を早々に切り上げる。

『それでは、盛り上がりも最高潮に達してきたようですので、最終試合に相応しい闘いを見せて頂きましょう！Ready...Fight...』

そして賞金100万円を巡る最後の闘いが、いま始まる。

いやね、お前どんだけ放置してんんだ。
今セリフ需要は無いでしょ？が、こんな作品を待つてくれてる物好き
さんのために、これからはちまちま書いて生きたいなー（希望）
しばらくは文章のリハーサルが必要だと思つたので、文がおかしくても
やるーく訂正して頂けると嬉しいです。

14話（前書き）

大格闘大会後編

ここ 決勝の舞台 に来るまで、それはもう運が良かつた。

対戦相手が何者かの闇討ちを受け負傷し辞退したり、急に体の痺れを訴え病院に搬送されたりといった感じに、運良く謎の不戦勝に恵まれたからだ。

やっぱり日頃の行いが良いからだと思う。

目の前の古菲も大人しく不戦敗してくれれば良かつたのだがそう簡単にいくわけも無い。

闇討ちするには中途半端に強いため手加減が出来ず大怪我をさせるおそれがあり、薬を盛るほどの隙も無かつた。

ああ、何故そんなことを知っているかという疑問は胸にしまっておいて欲しい。

搦め手が効かない以上、正々堂々やるしかない。やるしかないのだが、

「刃物は使えないんだよなー」

クナイも手裏剣も使えない、人の目もあるし気を使う事も出来ない。

純粹な体術による勝負。

だが、そんなハンデを差し引いても、この体はチート過ぎた。

「行くアルよ！」

『おつと、始めて仕掛けたのは古菲選手ー。』

素早く距離を詰めてくる古菲の突きを余裕を持つてかわす。せめて、一撃で終わらせてやるのが古菲のためにもなるだらう。

「だから」

軽くワンステップ前に飛んでから、着地と同時に古菲の鳩尾を貫手で貫く。

「お休み」

「つー?」

貫手を引いた瞬間、古菲はその場で崩れるよつて倒れた。忍であるなうば全てが一撃必殺であれ、とは里長の言葉だ。

『中武研部長古菲選手!ハツトリ(仮)選手の一撃? (残像しか見えなかつたけど) で崩れ落ちました! またか、これで終わつてしまつのか!~.』

成人男性が喰らつても三口は起き上がれまい。さすがに、点はズラしてあるが古菲もじぱりくは

「ゲホッ、ゲホッ……ゅ、油断したアル」

『立つた! 立ちました古菲選手!』

「は?」

じぱりくは起き上がりれないはずなんですが、このお嬢さんはなんんでしようかね?

咳き込みながらも、コラリと立ち上がる古菲を見て、仮面の下で冷や汗が流れるのを感じた。

「「Jの学園にこれ程の使い手が隠れて居たとは世の中広いアルな」「えーっと、今の効いてなかつたり?」

「いや、しかと効いたアル。中々の一撃だつたヨ」

なら何故立ち上がれるのかと。

まあいいや、今くらいいの攻撃でその元氣なら、

「もう少し本氣、出してもらひよな?」

「望むところネ!」

「後悔するなよ! 忍法オラオラオラオラオラオラオラオラーッシユツ!」

説明しよう! 忍法オラオラッシユとは、正面から距離を詰め連打で攻める威力は無視した速さだけの攻撃なのだ! 「J」に忍術の要素があるかは秘密である。

と言つても、一般人相手に使つて良い技じや無いのだけど。

念の為に言つておくが、決して何かに憧れたわけではない。

あと、無駄無駄アシールド! とかの防御技もあるが、それはまた別のお話じで。

突然だが、俺の体術には型というモノが無い。別に忍者だからと
いうわけでは無い、忍者にもきちんと体術の型はある。

ならば何故か?

理由は簡単。きちんとした体術など学ばなくとも、異常な身体スペックでどうにでも押し切れると知つてしまつたからだ。

まあそれも、最近やたらと強い自称吸血鬼と出会つた為に考え直す必要があるやも、とは思つてゐるのだが。

ただそれでも、一般人レベルでのかなり『テキる』程度の人間に俺のオラオラッショウを防ぎきれるわけが

『捌いている！古菲選手、ハツトリ（仮）選手の目にも止まらぬオラオラッショウ（笑）を捌いているぞっ！』

『こんな見掛け倒しの攻撃、効かないアル！』

「ちいっ」

「お返しするネ！」

おそらくは、拳法の型の一つ。避けることも出来るが、せっかくの格闘大会決勝、観客を楽しませるために、あえて攻撃を受けて効かないアピールするのも悪くな、

「いいっ！『パアツ！？』

「まだまだ終わらないアル！」

『今度は古菲選手のラッショウ！ラッショウ！ラアアアッショウ！ハツトリ（仮）選手は避けられない！』

「ちょ、待つ『ガツ』痛い！「ゴツ」痛いって！「ゴスツ」ぐふつ

……

『ダウーン！ハツトリ（仮）選手は古菲選手の猛攻の前にダウーン！』

『痛い、ちょー痛い。中国拳法ナメてた。なんか、体の中からちょー痛い。』

『このまま10カウント以内に起き上がらなければ、古菲選手のＫＯ勝ちということになりますが……ハツトリ（仮）選手、驚くべきことに古菲選手のあの猛攻を受けてなお立ち上がりました！』

「古菲、てめえは俺を怒らせた」

主にオラオラッショウを見掛け倒しと言つたこととかな！

「そつちが本氣でやらなからネ」

「そんなに本氣が」所望なら、見せてやううじやないか！ハアアア
アツ！」

封じていた氣を解放し、全身に巡る氣は髪の毛を逆立てる。おそらく常人にもうつすら白い鬪氣が見えるはずだ。

ちなみに、将来的にはスーパーな変身をあと4回は残している予定。

『「」、これは凄い！どういう仕掛けか、突如ハットリ（仮）選手を包むような白い半透明の何かが現れました！まさか氣なんてモノが実在するでもいうのでしょうか！』

「む、むう。これはちょっとマズいアルな……」

「後悔しても遅い。喰らえッ、これが俺の全力全開ッ！忍法オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラーッシユッ（強）！」

「ががががが……かはッ」

『避けられない！これは避けられない！古菲選手ダウーン！最強とも思われる中武研部長をここまで圧倒する人間が居ると一体誰が想像していたでしょうか！ハットリ（仮）選手、アンタは何者だーっ！』

全然忍術使つてないけど忍者です。

俺は氣を纏つた拳で、それはもうドン引きなくらい古菲をフルボツコしまくった。

とは言つても、本当に全力全開でやつたら規格外の古菲と言えども流石に死に兼ねない、それでも五分くらいの力は出したのだ、

『古菲選手！またしても立ち上がった！って、古菲大丈夫なのアンタ！それ腕折れてない！？』

「ク、ツ、ハア……だ、だいじょぶアル」

それなのに、何故こいつは立ち上がるのか。

「この学園に来て、お主のよつな本氣で戦える男に巡り会えたこと感謝するネ」

「それはどうも」「さうだつー」

「良かつたら、お主も中武研にどうアル?」

「生憎俺は今の部活が好きなんだ、遠慮しとく」

『えー、両者でなにやら話していたようですが私にはせっぱり聞こえませんでした!しかし、古菲選手の様子を見る限り、次が最後の一合となると見て良いでしょ!つー』

だつて、毎日水着女子を堂々と鑑賞出来るよつな素晴らしい部活他に無いよ?

それより、

「もう立つてゐるのも限界だろ?安心しと、100万は俺が貰つてやる」

「賞金に興味はナイが、お主には興味が出て来たアル。私が勝つたら賞金をあげる代わりに、お主に一つ願いを聞いて貰うところはどうアル?」

「勝つたらな。じゃあ、そろそろ」「うむ……

俺と古菲はお互に構え、そして

俺と古菲の戦いはあの一合で終わりを迎えた。

んで、結論から言つと、勝負に勝つて試合に負けた。

あの状態の古菲に、俺が負けるはずが無く当然、古菲との戦いには勝利したのだが、ここで大会運営側からの審議が入つたのだ。

『そもそも、現代忍術研究部つて格闘部なの? って言つが、部の発足人数足りて無いから、部として認められて無くない?』

なになに? 部の発足には最低条件として、最低5人の部員を必要とする?

よーし、まずは点呼だー。

「いーち

「いー、ドジョウの」

「.....」

「にんにん」

圧倒的に足りて無かつた!

これは、超に異議申し立てをせねばなるまい。
てなわけで、やつて来ました超包子。

「どうこうことだー話が違うで!」
「何がね? てか、そのキャラ作りこそどうしたネ」

「うつかり出ちやつただけなのでスルーして欲しいので」
「うん」

「面倒クさいから手短に、かくかくしかじかつてなわけなんだが」「部の発足に人数が足りず、現忍研が部として認められて居なか

つた。とシノブは言つてゐるでござる」「ふーん、え？ 今の通訳必要な流れじゃなくね？

「フム……」

これじゃあ俺が『かくかくしかじか』で話が伝わると思つてゐる、変な人みたいじやないか！

「そのキャラ作りは、楓と被るから変えた方が良いこと思つネ」「いや、もうその話はいいですか？」「

「そうカ？ 私は参加する方法を教えたダケで、部を作る手伝いをするとは言つてナイヨ」「

「うーん」「

確かにそれはそつである。これがハツ当たりと言つことも理解している。

でも、それでも俺は、

「お金が欲しかつた！」

「毎月しつかり稼いでるクセに、まだ欲しいアルか？」「

「当然だつ！ って、え？ なんでオーナーが知つてゐるの？」「

「聞きたいのカナ？」「

「…………」

人間さ、知らない方が良いことつてあるよね。

「むう、超はシノブが何をしてるのか知つてゐるでござるか？」「

「当然ネ」「

「…………」

即答されるとどう反応すべきか困るんですけど。それはもう切実

あれ？楓はどうして心なしか俺を睨んでるいるのかな？かな？

「おじ楓、腕を掴んでどうするつもりだ。待て、その関節はそっちには曲がらなギヤーッ…」

……
……
……
……

「どうわけで、俺は勝負に勝ったにも関わらず不正参加とこいつになり古菲が優勝。

賞金も古菲の手に渡つた。

ところで、古菲が勝った際には賞金を貰う代わりにお願いを一つ聞くという話だったのだが

「不本意だが、私の優勝となってしまったアル」

「まあ、不正参加になつたんだからしじょうがなこと」

「これ、賞金の100万ネ」

「え？本当にくれんの？本当に本当に貰つちゃうよ…返さなによ…」

「その代わり、一つお願いがあるアルネ」

「あるあ……？あー、中武研に入るつてのならバスね

「それはひとまず諦めたネ、ハットリ（仮）、お主、私のムコ（候補）になって貰うアル」

「は？」

「私、結婚するなら自分より、強い男とキメてるネ」

うん、田の前でもじもじしながら喋つてる古菲は気づいて無いけ

ど、なんかさつきから俺の背中にザクザク刺さつてる。視線とかじやなくて物理的な、そつ、例えばクナイだとか、棒手裏剣みたいな。さて、ここに居たら古菲まで巻き込み兼ねないしね。100万はここに置いて、と。

「さらばー。」

『ボフン』

と、地面に煙玉を叩きつけ煙幕に紛れる俺。この隙に、ヤツから逃げないと俺の身が……手遅れだった。

14話（後書き）

別に古菲との最後の戦いは思いつかなくて逃げたわけじゃないんだからねつ！

本当は1・3話と合わせて一つで載つけるつもりだったんですけどねー。どこかの誰かが放置していたもので（オイ

あと、3、4話やつたらそろそろ原作開始時に突撃予定。

15話（前書き）

ヨタ話。

完全に作者の妄想に突つ走つたお話。
楓可愛いよ、楓。

2002年3月某日

クリスマス？そんなモノはこの世から無くなりましたよ。
初詣？そんなの、軽くトラウマですよ。

バレンタイン？楓に殺されかけましたよ。

そんなわけで、今回はある日常のどうでもいいお話。別に、適当なネタが思いつかなかつたつてわけじゃないんだからね。

その日も、俺はいつもと同じように授業を受け、いつもと同じように部活に顔を出し、いつもと同じように女子の水着姿を堪能していた。

「何をしているんですか先輩？」

「見てわかるんのか、愚かな後輩よ」

「はあ……また、セクハラですか？」

「セクハラ？違うな、これは」

女子生徒達の成長（もちろん肉体的な意味で）を暖かい眼差しで見守るところが崇高な、

「長瀬に言いつなますよ」

「おい、大河内何をしている。喋っている暇があつたら泳ぐぞー！」

「はあ、私は休憩だから」

そんな俺を見て大河内は溜め息を吐いた。

「この水泳部期待のエース（あらゆる意味で）大河内は、最近よろしく無いことを覚えた。

きっかけは、楓が大河内に部活での俺の様子を聞いたのが原因のようだ。

そして、楓に俺の部活での様子がバレて……ガクガクブルブル、思い出すだけで3回は死ねる。

それ以来、俺が楓に弱いことを知った大河内はことある事に楓の名前を出すようになったのだ。

「大河内ってさ、酷い鬼畜だよね……」

「鬼畜じゃない。先輩が正しい道を歩けるように教育してるだけだよ」

ある意味裏の道を堂々と突っ走る職業なんんですけどーとは、言いたくても言えない。

「教育なら保健体育の実技が望ましいな。是非、手取り足取り教えて頂きたい！」

「そうか、じゃあ水泳をしよう」

「盲点だつた……」

そういえば水泳部つて水泳の実技する所でしたね、すっかり忘れてましたよ。

ん？でも、水泳を手取り足取りつてことは、色々な所が密着してウハウハな……いやいや、何を考えているんだ俺。大河内は中1なんだぞ？だが、あのスタイルは

そこですぐさま脳内緊急会議が始まり、そして、

「よろしくお願ひします大河内、いやアキラ先生つー！」

賛成票10、反対票0で可決されました！良心？理性？そんなモノは東京湾に重石つけて沈めてやりましたよ。
可愛い女の子と同意の元、水着で触れ合えるんだよ？拒否する理由があるなら上げてみる、ことじとく却下してやるー。

「先輩、何か邪な気配を感じるんだが」

「アハハ、気のせいですよアキラ先生。僕、煩惱のぼの字も持ち合わせて居ませんから」

「それは余計に怪しいよ先輩」

「それより、俺泳げないんだ。バタ足の練習するから手を持つて先導してくれよ」

泳げない振りして抱きついたりなんていう、キャツキャツウフフな展開が俺を待っている。

「別にいいけど……それなりにうつして、水泳部に入ったんだ？」

「泳げるようになるためだ」

「それなら尚更練習しようよ……おまけと準備していくから待ってくれ」

「はーいアキラせんせー」

冷静になつて考えてみれば凄く恥ずかしい光景である。

だつて、（中身）良い歳した男が中学生に手を引かれてバタ足の練習をしているのだから。

だが、今の俺にはそんなこと関係無かつた。

何故なら、目の前で揺れているのだ。何が揺れているのかはあって言つまい。

「バチャバチャ」

「その調子だよ先輩」

「バチャバチャバチャバチャ」

「うん、そろそろ手を離してもいいかもしない。じゃあ離すよ」

そう、この時を待つていたのだ。その自己主張の激しい、全てを包み込むような母性で俺を受け止めてくれ！

「うつ、沈む！沈むううーおーぼーれーるーブクブクブク」

「先輩！」

目を瞑つて空氣を吐き出し、わざとじたばた暴れ自らが沈むように仕向ける。

むにゅり。

驚いた大河内が慌てて俺を抱き留め、俺は水着越しの母性を思いつきり堪能。

むにゅむにゅむにゅ。

腕をがつしりと大河内の腰に固定し、その母性に顔面を押し付け色々な意味で溺れる勢いだ。

「うわあああん、溺れると思つたよおお」

「「つむつむ、もう安心で」」れるよ」

「助けてくれてありがとう！でも、足が疎んでもまだ動けないんだ。もつ少しのままでいいかな！」

「好きにするところで」」れる」

「お前は天使だな！アキラちゃんマジ天使！」

ふはは、今この瞬間だけは大河内の胸は俺だけのもんだぜ！

「せ、先輩……」

少し引き気味の大河内の声が聞こえる。しかし、ビハビハだらう？さつきから聞こえる声と比べて少し遠い。

つていうか、「じれる？」いやいや、幻聴で「じれる」。

ギギギ、と恐る恐る顔を上に向かふと、

「ニンニン」

ですよね。

どうして楓さんがニンニンらしきんでせうつか？

「先輩が何か企んでいたつたら、長瀬を呼ぶように言われていたから」

「せ、殺生な！」

「シノブは甘えん坊で」」れるなー、もつと抱きつこうといいで」」れるよ？ほれ、ギューッと」

「ぐあ」

極まつてゐる！首に極まつてゐる！けど胸気持ち良いー！へやつ、これが本当のヘルアンドヘヴンかッ

「といひ、夢をみたんだよ」

氣付くと俺は、楓と大河内と一緒に超包子のテーブル席に居た。

「やうでござるか」

楓は「口」と俺の話に相槌を打つ。

ところで大河内、どうしてお前は俺から距離を取つているんだい？

「いえ、先輩がちょっとキモ、じゃなくて気持ち悪くて」「酷くない？今の言い直したことによつてより酷くなつてない！？」「といひで、ずっと疑問だつたことがあるんだけど」

スルーですか？良いですけどね、もう最近こうこう扱いもアリかなーつて、気持ち良くなつてきましたしね。ウフフフ、と遠い目をして烏龍茶を一口。

「只野先輩も忍者なのか？」

「ブフーッ！」

「シノブ汚いぞござるよ、ほら口拭いて」

ふきふき、ん、楓ありがと。

つて、なーにを言つてらっしゃるんですかね、この子は。とりあえず適当に誤魔化さないと。

「クスクス、楓さん今の聞きましたあ？この子良い歳こいて忍者が

実在すると思つてこましむよー。」

「クイッと、烏龍茶を再び一口。わつか吹き出しあやつて飲めなか
つ、

「む？ 忍者は実在するで『ざる』よ？」

「ブフーッー！」

「うわつ汚い！ 先輩汚いつ！」

「え？ まさかのマジボケ！ 『ざる』は同意すると『ざる』だらう！

なんで『何馬鹿なことを言つてゐるで』『ざる』か？』 みたいな顔をし
てるんだよお前は。

あと大河内さん、マジで傷付くんでもつらし控え田にしてくれる
と嬉しつつ。

「でも、それと拙者達が忍者かどうかは別の話で『ざる』

「ぞ、ぞうじ『ざる』だから。ゲホッゲホッ」

「よしよし」

気管に入ったせいで咽せあがつたよ。背中をすつてくれてありが
とう楓、呼吸が楽になつたよ。まあお前が変なこと言わなきゃ、俺
も咽せ無かつたんだけどね！

「え？ でも長瀬は忍者じゃないの？」

「違うで『ざる』」

「でも、良く忍者の服着てるよね？」

「楓エ……」

「それに双子が、2人は忍者だつて言つてたよ。秘密だと言われた
だけだ」

おこ楓、だから忍装束を私服に使うなと何度も言つただろう。「とにかく双子の奴ら、『ここだけの話』とか『絶対内緒だけ』、とか言つてみんなにバラして回つてゐるんぢや……最もバラしてゐるのは姉の風香だらうけど。

「ハハハ、『ドモノザレゴトジャアナイカ』

「棒読みだよ先輩。それに、あの日は本当にこのことを言つてゐたんだつた

「じゃあ忍者だと思い込んでるだけだ。これでビリだつて……」「どうだって言われても……」

「仮に、仮にだぞ！ 仮にだからな！ 仮に、俺達が忍者だつたとして、それを知つてどうする？ 吹聴してまわるのか？」

「……どうもしない、かな？」

「そりでしょ？ キリせんないとするナジやないと諦じていたもの。

「じゃあ結局知らなくていいんぢやないか？」

「言われてみればそうかも、うん。そうだね」

「だろ？ じゃあ、このお話は

「先輩が下手なりに必死に『隠そう』としていることは、きっと隠さなきやいけない理由があるんだね。わかつた、もう探らなこと

終わりにしてやろうと帰るつか、つて言あつと思つたのに、最近本当に冷たいですね！ 一年も経てば扱いも流石に慣れきつてますねコンチクショウ。

「うむ、うん。でも、何故かな？ これで一件落着のせばなのに胸が痛いよ」

ざるか？今なら拙者の胸が空いてる』『やるが』

「は？何言つてんの？何が楽しくて義妹の胸を枕にして寝なきゃいけない『ブチツ』んだよ。そもそも『ギュ』」

あれ、田の前が真つ暗だよ？でもなんだか柔らかい感触に包まれて不思議。心なしか良いかほりもするけれど、それと同時に意識薄れて行くのはなんでなの？

誰か教え

「長瀬、兄妹同士でそういうことは良くないんじゃ……あ、でも、血が繋がっていないなら……ぶつぶつ」

「ほれ、ギューッで『ギューッ』」

あはは、なんだかお花畠が見えるー。
ガクツ。

「せ、先輩大丈夫なの？」

「シノブは昔から丈夫だったから、このくらいには平気だ』『やるかな

そしてボソリと楓は呟く。

「全く、いつになつたらわかつてくれるで』『やるかな

15話（後書き）

クリスマス（12月） 今の所、そういうイベントで絡めるほど
仲良い相手が楓しかいない。却下。

初詣（1月） 麻帆良に神社つてあるだけ？ああ龍富神社があつた
けど、原作キャラがチョイチョイ出でてきてやたら長くなつた挙げ句
煮詰まつて投下が遅くなりそうな気がする。却下。

バレンタイン（2月） 結局楓のヤンデレオチに走る気がする。却
下。

ホワイトデー（3月） バレンタイン関係やつとけば、じに繋が
るんだけど、バレンタインネタは今回やらない。却下。

結果、今回のある日常の中の一幕となつたわけです。
予定が変わらなければ、次回はエヴァ回かなー

この間にか前回から一週間も…

2002年5月某日

4月を迎える、新しい学年になつた。

エスカレーター式のため受験は形だけで終わり、俺は無事高校へと進学。

中学の時と特に代わり映えのしないそんな毎日を過ごしていた俺は、現在とある場所に招待されていた。

「一つ聞きたいんだけど」

「なんだ?」

「ファンシーな物で溢れてる」のお家が、本当にあなたの家なんでしょうか?」

「それがどうした」

「いえ随分と可愛らしい吸血鬼だなあと」

そう、俺は何故か、自称吸血鬼のお宅にお邪魔していた。去年の8月に俺を襲つてきた吸血鬼の少女である。いや、この場合、少女の姿をした吸血鬼というのが正しいかもしない。

なにせ、彼女は600年以上生きているそうだ。

「エヴァンジロンさんは吸血鬼の真祖つて奴なんですね?」

「ああ、そうだが?クク、まさか脅えて「それがどうして、中学生なんかやって「聞くな!」

「えー?」

即刻却下されてしまった。

あれからしばらくして思い出したのだが、彼女は楓のクラスメートの一人だったのだ。ついでに、彼女に付き従っていたロボットの茶々丸さんも楓のクラスメートであり、この家で給仕のようなことをしているようだ。それにしても、メイドロボが実用化されているとは思わなかつたな。

それとも、実はロボットのようでいて魔法的な何かで動かしているのか？良くある、ゴーレムとかガーゴイルみたいな。

「気になるなー」

「なんだ貴様、そんなに死にたいのか？」

「あーいや、中学生やつてる理由もそこそこ気になりますけど。茶々丸さんの方が気になつたり」

特に体の作りとか。調べたところH'ヴァンジエリンさんはあまり成績良くないし、学校に通つてる理由はきっと勉強をやり直したかったとかそんなところだらう、うん。

「そこそこ……」私が中学生をやつてこむことがそこそこ……

「じゃあ、すつじく気になります」

「だから教えんと言つてこいるだらうが」

「……」

この口ひばばア……不機嫌丸出しの返事をするから氣を使つてやつたつてのに。

教えるつもりが無いのに关心が低いことに不機嫌になるとかなんのこの人？

「始めてH'ヴァンジエリンさんにお会つた時にも思つたんですけど」「なんだ？」

やつぱつHガーンジHリンをたつて、

「面倒くさい人ですよねー」

「よし、殺す」

「うわあ、また面倒くせー」と言い始めたよこの人。面倒くせー」「貴様つ、オモテに出てるー生まれて来たことを後悔させてやるー。」

すつと胸元に手を突っ込んで一叫、

「実はこんなこともあらうかと、にんにくとネギのHキスを抽出した小瓶をここに用意してあります」

吸血鬼に抜群の効果を誇る、約100個分のにんにくとネギを甲賀忍の特殊製法で抽出した特別製エキスです。

「ぐつ、殺す、いつか殺す、必ず殺す」

両手をわなわなさせてギロッと睨みつけてくるHガーンジHリンさん。ただし言葉とは裏腹にジワジワと後退している。

怖い、怖いよこの人。にんにくとネギが無かつたら確実に死んでた気がするよー！

「と、まあ、冗談はここまでにして俺になんの用ですか？それとも、これはただのお茶のお誘いだったんでしょうか？」

「ふんつ、誰が貴様なんぞを茶に誘うか」

私がゴゾーを初めて見たのは、去年の4月。なんでも、若くして腕の良い忍者が来ると聞き、一目見てやるうかと思ったのだ。

そして、鬼共と戦うゴゾーを見て私は興味を持った、

『面白い技を使っていたな、少し遊んでやるか

それから、私は次の満月の日を待ち 続ける間に、花粉症にかかりました。

花粉は、容赦なく私を襲い、漸く花粉を意識せずに歩けるようになつた頃には既に数ヶ月が経過していました。

クッ、あの憎き花粉共め、許さん！許さんぞー！

数ヶ月後のある日、満月の夜、ついに私はゴゾーと戦う機会を得る。

『ま、鬼があの程度だつたわけだし、もし吸血鬼が居たとしてもた
いしたことないしょ』

ゴゾーはあるひことか、吸血鬼の真相であるこの私を、低級の鬼共と同一視するというナメた真似をしてくれた。

ゴゾーに吸血鬼の真相の力を思い知らせるべく戦い、ゴゾーを追い詰めた私は いかん、思い出したら吐き気が、寒氣もしてきた
……。

「おい、貴様一発殴らせろ！」

「え？」

「いくらなんでもあれは無いだろ、あれはー！」

あの日から3日間、にんにくや玉ねぎの臭いが取れるることは無か

つた。学校も休み、家に籠もるもそれすら苦痛だった。私は生涯あの怨みを忘れることは無いだろ？

「あのー、話に全くついていけないんですが」「黙れ！そして、大人しく殴られる！」
「んな無茶な……」

あの田から、既に半年以上経っている。季節も巡り、今は再び私が苦しむ季節が訪れている。

「なのに、なぜ今更、貴様を呼び出したかといつと
「といつと？」

作者の都ご げふんげふん。

「貴様の血が欲しいからだ」「あー、吸血鬼ですしね」

え？ それだけで納得するのか？ と思ったが、完全に疑いの目を向けてるな。ここは、それっぽいことを言っておくか。

「戦闘技術の未熟さの割に、異常に高い貴様の身体能力に興味がある」「……本音は？」
「この前の仕返しに、動けなくなるまで血を吸つて辱めてやりたい」「帰ります」「待てっ、冗談だ！」

というのは嘘だ、機会があれば虐め抜いてやりたいと常々思つてゐる。が、ここで帰られては困る。

「ゾーはしふしふといった感じで椅子に腰を降ろす。

「で、100歩譲つて血を提供するとして、俺は何を得られるんです?まさか、タダつてわけじゃないですよね?」

「当然だ。だが、お前は何が欲しい?私はお前の趣味なんて知らんぞ」

興味があるのはお前の身体、もとい血だけだしな。

「お金、と言いたい所ですけど金なら学院長からいくらでも絞り取れるだろ?」、吸血鬼ならではのトンテモアイテムとか無いんですね?」

「イツは私に何を期待して……ん? そうか、アレがあつたな。アレを使えば「イツなんぞ

「フフ、そうだな……良いモノがあるぞ」
「いや、笑い方が不吉過ぎて怖いんですけど」
「私に着いて来い、報酬の先払いをしてやる」
「あのー、やつぱり遠慮したいかなーって」
「茶々丸」

「はい、マスター。失礼します、只野さん」

それだけで茶々丸は言いたいことを察した。茶々丸はゾーを後ろからガツチリと羽交い締めにする。

「おい、待て!放せ! いつたい何をするつもりだつ!」
「申し訳ありません、マスターの御命令ですので」

うむ、やはり良い従者だよ茶々丸は。これに限っては葉加瀬や超

に感謝せねばなるまい。

「なあに、心配する」とは無い。ちよつとしたバカنسだと思えばいいや。」

埃を被つていた別荘^{アパート}を引っ張り出し、魔法陣に踏み入り転移。そう、バカنسだ。もつとも、貴様では無く私にとつてのだがな

「バカنس？ つて、なんじゃこいつやーー！」

あ、ありのまま今起こつたことを話すぜ！ 僕は奴らに家の地下に連れて行かれたと思ったら、いつの間にか辺りは見渡す限り海になつていた！ な、何を言つてゐるかわからねえと思うが（以下略）。

「どうだ？ こには、私の別荘のようなものだ。いいで一日過いしても、外では一時間しか経過していない」

それなんて精神と時の部屋だよ。しかも、リゾートっぽいし。ファンタジーすげえ。

「これをくれると？」

「さすがに、やるわけにはいかん。が、これを自由に使う許可をくれてやる。自分で言うのもなんだが、これはかなりの破格条件だよ」

まさか、リアル精神と時の部屋を見られる上に自由に使えるとは、

確かに破格な条件なのだろう。これは、修行フラグか……

「いいですよ、死なない程度に俺の血を上げます」

「死なない程度？貴様は何を言つている」

「え？何つて」

「貴様の加減など知るものか、私が満足するまで血を吸いまくつてやるぞ」

「ハハハ、またまた」[冗談を]

「言つたハズだぞ？」『この前の仕返しに、動けなくなるまで血を吸つて辱めてやる』と

「やれやれ、このお嬢さんはコレの存在を忘れていらっしゃるらしい。

胸元から再びにんにくキスを取り出し、エヴァンジエリンさんの目の前でブラブラとちらつかせながら、

「死なない程度にはあげると言つてるんですから、それで納得してくれませんかね？出ないコレを」

ピキピキッ、カチーン！

「コレを、なんだ？どうした、言つてみる」

あれー？なんでかなー？俺の左手が小瓶だとカチーンカチーンとなってる。

「つて、ぬあああああー！」

「フフフ、どうかしたのか？」

「魔法はあのフラスコが無いと使えないんじや」

「この中は外より魔力が充溢しているからな。この程度は造作も無

۱۱

そう言つて両手をバキバキ鳴らすエヴァンジエリンさん。出る！こんな危険な所一刻も早く出るつーと、ここに来た時に使つた魔法陣に向かつたのだが、

「動かない……？」

「……といつ」とは、田舎だないと出でられないよ、にしてあるからだ」

「本来の力には程遠いが…… フフ、今の私から丸1日逃げ続けるこ
うが出来るがな」

ふん、『出来る』か、『出来ない』かじやねえ、『やむ』のか『

やがれの『のたた

「くへ、やうすいせいが二二の二。」
「やうじでなくしてはな つて、ねこ。」

俺はエヴァンジエリンさんに向かつて正面から立ち向かう、わけも無く、背を向けて全力で逃げ出した。

そして

「ちうー……マズいつ！が、」**レ**の身体中に気が満ちる感覚つ！これ

は
「

「あの、そろそろ」勘弁を……」

「聞こえんな

「そんなん無体な……」

いやー、負けた負けた！

5分も保たずにとつつかまって完膚無きまでにフルボッコされちゃいました。

外でさえ満足に適わないといつのこと、魔法操るエヴァンジエリンさんに勝てるはずも無く、俺はされるがままに血を吸われ続けるのだった。

サボってたツケがまわってきたなあ。

もし生きてたら今度から真面目に修行でもしよう。

吸血されながら、固く心に誓

「ちがー

「ちよ、ヤバい！もうヤバいっ……アーニーツー！」

17話（前書き）

今回はちょっと短いです。
本編突入前の前編。かな

あの日、エヴァンジエリンさんの別荘に連れこまれた俺はビルで生還することが出来た。

別荘を使うことで、エヴァンジエリンさんの好意という名の修行（一方的に襲われるだけ）を繰り返した俺の身体能力は格段に上がっている！はずだ。いや多分上がってる、おそらく上がって、きっと上がってる、上がってたらしいなあ……。

はつきりしろって？だつてしようがないじゃないか。ジワジワと追い詰められた後は、毎回組み伏せられて血を抜かれるんだもの。物理的にボツコボコにされるわけじゃ無いから、超回復が働いて無い気がするんだよなあ。

まあそんな調子で月日は巡り、この学園に来て二度目の麻帆良祭も終わり、夏休みもあつという間に過ぎ去って、季節は秋。今年も再び大格闘大会が始まる。今度こそ、優勝して賞金ゲットだぜ！

「と俺の心は燃えていたのだった！」
「燃えるのは結構ですから、只野さんも仕事をして下さって
まるで小姑」「誰が小姑ですか、来ますよー」「はい、はーい」と

桜咲に促されるまでも無く田の前に迫る鬼を小太刀で一刀両断する。うむ、今宵の雲水も良い仕事をしてあるわ。

あ？何しててるかつて？久しぶりに侵入者の撃退なんぞをしております。

「田で追えるようになつてからわかるようになりましたが、只野さんの太刀筋は滅茶苦茶ですね」

「ハハハ、いやつめ！褒めても何も出ぬぞ」

「褒めていません」

何故かな？俺に慣れた人達はみんな似たような態度をとるようになるのは、不思議でならない。

「只野さんが面倒くさい人だから、ですつ！」

「全くもつて不思議だ、なあつと！」

「聞こえないフリをしても現実は変わりません、よつ！」

一体、また一体、と斬り伏せながら会話する俺と桜咲。最早、この程度なら慣れたものである。

「桜咲つて、少しば歯に衣を着せた方が良い思うの」

「ふう、大丈夫です。私がこういう態度を取るのは只野さんだけですから」

「え？ それつて、俺が特別な存在つてこと？」

「そういう所が面倒くさいんですよ」

溜め息を吐きながらうんざりした表情でポツリと呟く桜咲。
傷付かないと思っているかも知れないが、わりと傷ついてるから
な！そりやあもうガラスのハートだし、ひび入りまくりですよ。

「ガラス……ブツ」

「人の心を読んだ上に、心から馬鹿にするのは止めていただきたい
つ！」

「口に出ていましたけど」

「なんですとつ！ って、あれ？」

「どうかしましたか？」

「……ちょっと離れた所に知らない奴の気配が。それと、そいつを追ってる? 気配がもう2つ」

しかも、追う方も追われる方もなんとなく知ってる感じの気配だ。追われてる方の気配はなんて言つか、日頃から慣れ親しんでる的なまさか……まあ、確認すりゃわかるか。追ってる方もどこかで会つてる気はするんだけどわからん。

「不味いですね。人払いの結界は張つてあります、それでも稀に迷い込む人が居ますし」

「一応誰かが、追つてるみたいだけど味方つて断言出来無いし……分身を向かわせるか?」

「はい、お願ひします」

「はいよ、二二二二二二二二」と

印を切り、一体の分身を出現させる。持ち場を離れるわけには行かないでの、こいつた場合はこの方法で対処しているのだ。

「頼むぜ俺。追つてる奴がわからん以上、両方に気をつけろ」「任せろ俺。もし、逃げてる方が予想通りの相手だったら……」

分身は俺に向かつて親指をグッと立てると、影の中に溶けるように消えて行つた。俺もグッと親指を立てて分身を見送る。

「見る度に便利だとは思いますし、凄い術ではあるんでしょうけど、只野さんが使うと凄く馬鹿っぽいのは何故なんでしょうが?」

「自分だって、テストの成績そんなに良くないくせに。この前の数学のテストだってギリギリ赤点を免れて」

「なつ、私は頭の良し悪しを言つてはいるわけでは! とこりか、どう

して只野さんがテストの点数まで知っているんですか！？」

「それはほら、楓の周辺情報を知つておくついでに色々と……ね？ 目を逸らしてわざとらしく口笛を吹く俺を、桜咲はジト目で睨みつけるが口を割らないと察したのか話題を変えた。

「はあ……そういうえば、追われている方に心当たりがあるような口振りでしたが」

「うん。予想が当たつてたら、桜咲も知つてる奴だよ」

「私が知つていて、魔法関係者じゃない クラスの誰かですか！」

？

「予想の通りならね」

桜咲……学園内の魔法関係者じやない知り合いつて、クラスメイトしか居ないのね。寂しい子つ！まあ、俺も人のことは言えないけどさ。

「つと、懲りない奴らだね。そつまでもして、この学園には価値があるといふことなのかな」

香氣に雑談している間に、周囲には再び召喚されたであろう鬼たちがざつと一桁ほど。

桜咲は抜いていた刀を鞘にしまい、腰だめに構える。

「例えどんな理由があるつと、お嬢さまには指一本触れさせません

！神鳴流奥義 斬岩剣つ！」

ズバツ！

まさにそんな擬音が目に見えるかのような一閃。

桜咲の一撃は、まるで三 無双で雑魚敵を一掃した時のように、

鬼たちをまとめて吹き飛ばし宙に舞わせる。

「おーおー、お嬢さま遊ばれてるなあ。妬けちゃうね」

「なつ、何をつー！」

「んじゃ、俺も最近扱えるよつになつた新技を」

「ベンツー！」

掌に浮かべた気は薄い円盤のように広がると、やがて高速振動を始める。

「行くぞ ナッパ避けろー！」

「ザンツー！」

叫ぶと同時に投擲した気の円盤は、触れた鬼共を真つ一につにしながら空の向こうへと消えていった。こいつしないと後処理に困るしね。その場に残つたのは、胴と上半身があわらばした鬼だったものと、運良く難を逃れ田の前の光景に恩れおののく鬼だけ。

「バカめ、どうこいつ技か見切れんからこいつなのだ」

「ナッパヨケロ……変な名前ですが、恐ろしい技です」

「あー、うん。やつね」

「氣田斬つてちやんとした名前があるんだけどね。ほら、一応形式的には『ナッパ避けるー』は押さえとくべきでしょ。」

「「「」」」れで片付いたかな？」

「やつですね、問題ないとと思こまへ」

「後は他のヒリアの担当者が片を付けるだの。よつぱんの」とが無ければ応援も要らないはずだ。」

それにしても、追われているのが予想通りの奴なら、ひと波乱ありそうな気がヒシヒシ と、思つたら案の定か。

「悪い、桜咲。予想が当たつたみたいだ。ちょっと行ってくるから、ここは頼む」

「待つて下さい、私も行きます」

「えー？ でも」

「只野さんが、ここにもう一体分身を置いていけば問題ないはずです！ それに、追われているのがクラスの誰かなら余計に気になります」

「しゃーない、そこまで言つならわかったよ

珍しく強情な桜咲に軽く疑問符を浮かべながらも、俺は渋々と分身の術を使うのだった。

やれやれ、ちょっとばかし長い夜になりそつだなあ

18話（前書き）

凸 零の軌跡とか色々やつてたら二つの間にやる…次回から本編辺りに

「それで追われているところのは誰なんですか？」

気配に向かつて走る最中、件の逃亡者について桜咲が尋ねてきた。分身は既に対象者と遭遇しているため正体はわかっている。

「麻帆良一の天才、超鈴音だよ」

「超鈴音？ 彼女が何故……」

「偶然迷い込んだのか、あるいは

「何か企んでいる？」

個人的には、超包子のオーナーとして付き合ひのある超鈴音。あいつは常に何かしら企んでいると思ひけれど……ん、そろそろか。

「まあ本人に聞けばわかるよ。んーと、桜咲はあっちを頼む。俺はこっち行くから」

「気配を追えるなら別れて探索する必要は無いのでは？」

まあ、そりなんだよね。ちょっと、そういう訳にもいかない事情が出来たし、ここは適当に。

「それが、たつた今見失っちゃったんだよねー」「見失っちゃったんだよねー、じゃありませんよー」「てへー

「どうしようもない殺意を覚えたのですが

「そんなものはそちらの狗にでも喰わせてしまえ。それより、早く見つけないと逃げられちゃうよ。ってなわけで、お先へ」「あー、ちょっと待つ

といつ、声を背で聞きながら俺は木々の中に飛び込んだ。フリをした。それからしばりくして、

「どうやら撒けたようダナ」

木の影に隠れて桜咲の背中を見送る俺。その後ろにある茂みから、さらに隠れていた超がしたり顔で出て来る。先行した俺の分身も一緒だ。

「撒けたようダナ、じゃねーっての」

「静かに。見つかってしまう」

「桜咲は既に離れてるよ、追っ手の2人も足が止まってる。しかしつづづく驚く技術力だなあ、オイ」

超が羽織るようにして身に着けているのは、光学式迷彩試作機なるハイテクマントラしい。発動は安定していないものの、一度発動すれば姿も気配も隠してしまう優れもの。

これがあれば今日からキミも立派な忍者だーちなみに、製作費は一億だとか。

「一応中学生だつたよね？」

「この世界ではそういう設定ネ」

「設定、ね」

「テストも兼ねての情報収集だたのダガ、全くマズい」とこなたヨ」「せめてテストくらいは済ませておけよ

「他の魔法先生達ならどうにかする準備は……いやはや、高畠センセが居たのは予想外ネ。学園に居る間はこの手の仕事はやらないと聞いてたのダガ」

「高畠センセってのはそれほどのモンなのかい？」

話したことは無いが、名前は知っているし、遠くからではあるが顔も確認した。だが、戦っている所を一度も見たことが無いのだ。遠田からでも、そこそこ出来るとは思っていたけどね。

「ヒュアンジヨリンさんには劣るだろうが、こちら 旧世界だけで無く、魔法世界を含めても間違いなく最強クラスの使い手！」
「あのー、聞き流し難いワードが出て来たんだけども。つーか、良くそんなん人から逃げられたな」

世界最強クラスだと、旧世界だと魔法世界だと。

「迷彩があたからね。そんなコトより、ワタシを捕まえようとしないというコトは、依頼は受けて貰えると思っても良いのカナ？」

依頼。

それは、俺と桜咲がこの辺りに到着する数分前のこと。一足先に超を補足した俺（分身）は、何故こんな所に超が居るのかと事情聴取していた。

『来るべき日に向けて、魔法関係者の戦力調査』

超はあつたりとその目的を吐いた。そして、さうにいつ続けた。

『ワタシを見逃して欲しいのダガ。出来れば、見送りつきでネ』

それから考える間もなく、俺と桜咲が到着し、やむなく桜咲を遠ざけることになり、今に至る。

「逃げようとしないから捕まえてないだけかもよ」

「シノブの身体能力についてのデータは、既に茶々丸から得ている。ワタシでは、この補足されている状態からは逃げられナイヨ。ましてや、頼みの綱はこの通りネ」

頼みの綱こと迷彩マントはバチバチと火花を散らし、うつすらと煙も上げている。素人目にも再度使えるようには見えない。

それより、データつてエヴァンジエリンさんの別荘でのアレのことか? ということは、いつもエヴァンジエリンさんにぶつ飛ばされて泣きを入れてる所も超にバツチリ知られている?

「絶望したつ!」

「?なんだか良くわからないガ、まさに絶望してるネ。そういうワケでさつさとワタシを全力で逃がすヨロシ。全力で!」

絶対遵守しなきやいけなくなる不思議! とかいう冗談はさておき、俺が学園長から受けた依頼は、学園への侵入者を捕獲、排除すること。不審者は捕獲対象であるし、魔法を知らない人間も捕獲対象ではあるが、超は魔法のことは知っているようだし、学園の生徒である。

とすれば、依頼にはギリギリ反していない。か?

「まあ、黒に限りなく近いグレーゾーンだけど」

「結論は出た力ナ? なら、早くするネ、幸い顔は見られてナイヨ」

「とりあえず結界の外まででいいよな?」

超はそれに頷く。オーナー(超)には散々世話になつてゐるからな、ここひで借りを返しておかないと利息がとんでもないことになりそうだ。

超が何をやるつもりなのか、来るべき日とやらが何を指すのかは

知らない。しかし、万が一、魔法関係者に害を成すのが目的だとしても、楓に被害が及ばなければそれ以上干渉する気もない。

「ちょ、何す……んーっ！んーっ！」

そんなわけで逃がすための仕込みを終えた俺は、問答無用で迷彩マントを超に被せると、そのまま脇に抱え、高速人払いの結界を抜けるべく走り出した。念のためにお面をつけて

……

……

……

「この辺りまで来ればいいか」

「んーっ！んーっ！」

夜と言えば忍の得意とする時間。隠密には持つてこいである。当然、跡をツケられることなく、高畠センセとその他一名は撤いてきた。桜咲の方は、俺の分身が適当に話をして、2人して持ち場に戻っているハズだ。

マントの下でじたばたする超に苦笑しながら、

「わかつたわかつた。今降ろ「驚いたな、危うく逃げられるところだつたよ」つ！」

「さて、大人しく捕まつてくれると手間が省けるんだが」

その声に超はビクリと動きを止めた。

えーと、何? 何なのこの気の量は? 前見た時と全然違うんですけど。あれですか、気を抑えられちゃう感じの人ですか。てゆーか、なんで着いて来てるで? じやるか。とか、もうもう聞きたいことはあるけども、とりあえずは、

「…」

- 10 -

振り向きざまに、目眩ましの氣弾を追つ手
高畠センセに放つ。

「んーっ！？」

結界の外に向かって、力いっぱいに超を投擲。着地はどうにか自分で頑張れ、捕まるよりはマシなハズだと心中で十字を切る。

「気の使い手か。もう一人を逃がして、自分はその時間稼ぎというところかい？」

げ、目論見がバレテーラ。思わず高畠センセの氣当たりに気圧されて、交戦体勢をとる。

「片方を逃がそうとするということは、そちらが大事な情報を握っているということかな」

大事な情報を握ってるかどうかは知らないけど、何かは企んでいた。そうではあつた。

「沈黙は肯定と受け取つておくれよ」

別に肯定しているわけではない。ついでに言つと、声を覚えられると万が一困った事態になる可能性も考慮して喋らないだけだ。変声術はあまり得意じやないのではある。

「それならあちらを追おつかと思つたけど、さすがにそれは許してくれないようだ」

いやいや、滅相もないで、じわるよーーのポーズは、ほら、なんていうか防衛本能つていうか。

高畠センセは両手をポケットに突っ込んだまま、まるで無警戒に弧を描くように近づいてくる。

高畠センセは本氣のエヴァンジエリンさんには劣るもの最強クラスには入るらしい。とすれば、別荘の中、ましてや魔法を使えなイエヴァンジエリンさんにも真っ当な対抗手段を持たない俺が勝てそうな道理も無いわけで。

「実はあちらの方の『彼女』には心当たりがあつてね」

「…………（な、なんだつてーー）」

心の中で戦況分析をしてくる俺を差し置き、なにやら高畠センセによる衝撃の告白。

おーおい、超さんや。あなたの正体バレてるクサイですよ。つか、逃げたの超無意味じやん。俺が時間稼ぎする意味は……無くもないか。心当たりがあるだけで、確証には至つてないわけだし。なら精々、時間稼ぎでもしま

「せつこつわけで、今は正体不明であるキリの方を優先させて貰つよ」

その瞬間さらに高畠センセの気配は膨れ上がる。

ハハハ、そんなこと仰らず遠慮無く超を追つて下さいよ。こちらとしては、人払いの結界外に逃した時点で依頼は達成してるわけですし、いわばこれはアフターサービス的なものでして、時間稼ぎ？ナニソレ、ウマイノ？こんな相手にしてられるか、バーカ！バーカ！

パンツ！

「つて、がはつ！」

仮面の上から顔を殴られた？何だ今？高畠センセは、両手をポケットに突っ込んだままで何かをした様子は無い。気を放つた気配も無かつた。だとすると、魔法的な何かか？でも、そんな素振りは微塵も、

パパパンツ！

「あつ！がつ！じつ！？」

「ほつ、これを耐えきるのか。なかなかやるなあ

高畠センセは素直に関心しているようだ。少しではあるが、眠そうな目を見開いたのがその証拠だろう。ちなみに俺も仮面の耐久性に少しばかり驚愕を覚えていたりする。

だが、伊達に耐久性に優れた体作りはしていない、確かに目に見えない攻撃を避けるのは困難だが、ダメージ自体はそう大きいものではない。

それに、俺は見た。目に見えない攻撃のカラクリを。

今この攻撃を喰らう寸前、俺は分身の維持に必要な最低限の気を残し、

自身の全ての気を身体強化、視力強化にあて、高畠センセの動きを把握することにのみ務めた。

高畠センセの攻撃を受ける寸前、彼はポケットに突っ込んだ両手を尋常では無い速度で抜くと同時に、その拳で俺を撃ち抜いたのだ。距離があるため当然拳は届かないが、それによつて撃ち出された拳圧は別。

仕組みがわかつてしまえば後は簡単。目に見えなくとも、拳圧を凌ぐ装甲、この場合は拳圧を凌ぐ身体強化をしてしまえば良いだけだ。あるいは、視認出来るほどの気を纏うか。これで時間を稼いで、後は頃合いを見て逃げればいいが

パンッ！

「…なるほど、思つた以上に……なら

「こちらの期待を裏切り、先ほどとは違つ手応えを感じたのか表情が変わつた。高畠センセも見破られたことに気付いたのだろう、先ほど膨れ上がつた気配にトゲトゲしさを含み始める。

すると、高畠センセはおもむろにポケットから両手を出した。まずいな。このままじゃジリ貧になると踏んで、勝負をつけにきたか？

「左腕に魔力、右腕に気

高畠センセが呟くと同時に、両腕は視認できるほど光を放つ。それを胸の前に持つていき、

「合成つ！」

瞬間。

合わせたソレは、先ほどとは桁違い。『氣』であつて、『氣』ではない異様なオーラをその身に纏つ高畠センセの姿がそこにはあつた。

高畠センセが俺に向かつて飛び上がって来ると同時に、ポケットから出した拳が振り下ろされ

ズドオオオーンッ！

「うーん、少しあり過ぎたかな」

田の前には、5メートル程のクレーターとその中心で氣絶している彼の姿があつた。

彼が何故、侵入者、おそらくは超くんを底つたのかはわからない。仮面をついているのは、顔を隠しているつもりだったのだろう、気の感覚で正体はバレバレなんだけど。

「どうしたものかな……」

死んではいないはずだが、ピクリとも動かないのを見たといふ完全に無力化したとみて良いだらう。分身が得意らしいが、その氣配も無い。

しかし、まさか初撃の居合い拳を耐えきつたのはおるが、あんなに呆氣なく破つてくるとは思わなかつた。入づてに聞いていた以上のタフさに、ついこっちもムキになつて、感卦方を使つた豪殺居合い拳なんて使つてしまつたわけなんだけど。

「んー、あつちば無理か」

田を瞑り、周囲の気配を探るも何の気配も感じられない。時間はたいして掛かつてはいないけど、あの超くんにひとつては十分と言える時間のはず。彼女も一体何を企んでいるかは知らないが、面倒だけは起こさないで欲しいな。

「とりあえず、超くんのことについて彼に知ってる限り吐いてもらいうしか……」

ひとまずガントルフィー二先生と合流しようと思いつて、彼を回収するため自身が作り出したクレーターに近づいたその時。

彼は僕の田の前で、ズブズブと地面に沈むように消えていった。

「しまった、逃げられたか！」

迂闊。彼が居た場所を触つて確かめるも、なんの痕跡も感じ取ることは出来なかつた。明確な証拠が無い以上、彼女らを捕まえることは出来てもシラを切られてお終いだ。じつこのつのは現行犯で捕まえなくては意味がない。

やれやれ、教え子を捕まえることも出来ず、その協力者も捕まえることが出来ず、いつたい何のために出張つてきたのやう。

無機質な音を鳴らす携帯のアラームで田を覚ますと、やけに男子寮にある自分の部屋だった。

「あれ？ いつ帰ってきたっけ」

帰ってきた記憶が無い。昨日は確か桜咲と警備に出て、途中で超を拾つて、その後に高畠センセと戦う、といつか一方的にやられて、と俺の記憶はここまでしか無い。が、

「セツニツ」とか

分身Aからの記憶で残りを補完。それによると、俺は高畠センセに瞬殺された後、逃走の補助のために地中に潜んでいた分身の土遁によつてどうにか助けられたようだ。それから、この部屋に戻り、桜咲と共に居た分身Bも帰宅。身体機能の回復に努めるために同化して、今に至る、と。

「高畠センセー、か……ヒヴァンジヨリンさんより強いんじやないのか？」

あの妙なオーラを纏う前と後の差。今の俺では到底適わない、そのアテも無い。せめて、仙豆的なアイテムがあればな。

△△△△△△△△△△

未だ鳴り続ける携帯電話が田に入る。アラームを止め忘れていたのを思い出して、手に取り、携帯電話を開いてアラームを止めた。ふと、おもむろに田付に田付に田を向けると、

「げつ、よつ、び……？」

いやいや、待て。昨日は土曜日だった。であれば今日は日曜日で無いといけない。なのに、日付は月曜を示している。

ならば答えは簡単だ。

そう、丸一日寝ていたということである。

そして、改めて携帯を見ると、時刻は既に九時を表示していた。

「つて、冷静に携帯見てる場合じゃねええええ！」

遅刻だ、遅刻！

これも全て高畠センセのせいだ、そうに違いない。と心の中にある、『いつか10倍返しにするリスト』に、新たに一つの名前を刻むシノブであった。

時は少し遡って、日曜日。

シノブが高畠に瞬殺された場所から、そう遠くない建物の一室。

そこで、前日の様子を記録した映像を見ている者達がいた。

「アイヤー、5分と保たなかた力」
「しかし、高畠先生をその気にさせる程度の実力は持ち合わせているようですねー」

「仲間として迎えるに値する人材ヨ」
「わざわざ、危険を侵して試してみた価値はあった、と」「つむ、シノブとガントルフィー二先生との戦闘、データが取れなかたのは残念だたが。問題は」「長瀬さんのことですか？」

「いや、違つネ。彼女に關して手を出さなければ、シノブは問題ナ
イ」

「では？」

「そろそろ来るハズの、ワタシの御先祖様ヨ」

「ああ、例の」

「まだ10にも満たぬお子様ダガ、使い様によつては、充分学園側
に対して良いカードになるハズネ……フフフ、会つのが楽しみヨ」

あれ？主人公がまともに勝ったのって雑魚だけじゃね……？

19話（前書き）

就活中にしき投稿が遅れに遅れました。
正直これを書き終わつたあと何してるんだろ？俺。orz
つて気分になつた……しかし自重も自嘲もしない！
ネギ登場回、しかし空氣

一通のメールを受信。

『もう限界だ。意味がわからねえ』

三学期が始まり、モテない独り身の男性にとって地獄の用のメールから数日も経たないある日のことだ。

差出人は、ちう。

初等部から学園に居たという彼女が、いまさら並の出来事で参るわけでもあるまい。だとすれば、よほど直面し難い出来事でもあったのかも知れない。

最も、今までの鬱憤が積もりに積もったという可能性もあるのだが、それにしても何か限界と感じるに至るきっかけがあつたはずだ。とりあえず、

『がんばれ、超がんばれ』

とだけ送つておいた。返信は無かつた。

その日の彼女のホームページにある日記が荒れに荒れていたのは余談である。

翌日、こんな噂話を耳にした。

『10歳の子供が教師をしているらしい』

なんでも、麻帆良女子中等部のどこかのクラスに新しく担任が就いたらしい。

担任が代わる、それだけならよくある話なのだが、その担任とやらが噂の当人である『子供先生』だそうな。

そこでふと思ひ出す。昨日はスルーしかやつたけどその原因も見えてきた。

昨日ちうから届いたメール、女子中等部に10歳の子供が教師として赴任したと云う噂、そして何故か特異な奴らが集まるあのクラス。

深く考え無くとも、ちうのメール原因は特定できたようなものだ。

「それにしても10歳のこどもが女子中等部で教師か。人格形成に変な影響を与えそな……あれ？」

なんだか昔そんな話を聞いたことが無かつたか？なんだつたかな、この喉のあたりまでかかるつているんだけど。
まあいいか、思い出せないつてことはたいしたことでもないんだ
わい。

「動きが鈍くなつてきているぞ、ゴゾー」
「ちいつ、この2人相手はキツいですつて！」
「ハツ、その程度で何を言つてゐる。チャチャゼロも茶々丸もまだ
まだ本気では無いぞ」
「ケケケ、ブツ「殺シテヤン」」

ポテチをバリバリ食ひながら、床に寝つ転がつてつまらなさそうに野次を飛ばすのはエヴァンジョンさん。

そして、絶妙なコンビネーションで襲いかかつて来るチャチャゼロと茶々丸の両名。

チャチャゼロは変則的かつ明らかに殺氣のこもつた攻撃を、茶々

丸は致命度の高い攻撃はしてこないものの、こちらの攻撃パターンを解析、学習し、適宜対応してくるため隙が出来ると確実にそこを突いてくる。

何故こんなことになつているのかなんてのは言わずもがな、昨年の秋頃に高畠センセが俺をぶつ飛ばしてくれたからである。

それを聞いたエヴァンジエリンさんは散々俺をこき下ろした後に、

「チャチャゼロに遊んでもらひ。あいつも暇そつにしていたし最近は遊び相手もいなかつたから良いオモチャとして扱つてもらえるだろう」

「チャチャゼロ？誰ですそれ？」

「わたしの従者だ」

「名前からすると茶々丸のようなロボ娘ですか」

「いや、人形だ」

「…………」

「何か言いたそうだな」

「従者がロボ娘に人形か……なんだかんだ言いつつ別荘貸してくれたり俺とも話すしちよつかい出してくるし、エヴァンジエリンさんつて実は結構寂しがり屋っぽいよな。とか言つたら

怒るだろうな。家中とか服も少女趣味だし、精神的にも幼いのかも？精神は肉体に引っ張られるとか言つしね。今度からもうちょっと優しくしてあげよう。いえ、特に何も」

「思つたことが全部口から出とるわーっ！…」

怒りと恥ずかしさからか、顔を真っ赤にしてブルブルと震えるエヴァンジエリンさんの飛び蹴りはそれはもう痛かった。ついでに可愛かった。

と、まあそんなわけで彼女の従者による遊びと称した修行を昨年から定期的に続いているわけだ。

「ふーつ、今日はいいまでかな。ありがとうございました」

本日の修行を終え、今は吸血タイム。
エヴァンジエリンさんが俺の血をちゅーちゅー吸いながら、
だ、と切り出した。

「明日は用事があるからゴゾーの相手はできん

「用事? 珍しいですね」

「ほつとけ、大事な用事なんだ。そういうことだから明日は別荘を
使うのはナシだ。わかつたな」

「了解しました」

明日はどつちみち年に2回の学園メンテで夜間の警備に増援として駆り出されることが決まっていたため、元からここに来るつもりは無かつたし問題は無い。
それよりだ。

「今日はやけに吸いますね、そろそろやばい感じがヒシヒシしてい
るんですが」

「明日は大事な用事があると言ったはずだ。（あの忌々しい呪いか
ら解放されるためのな……）それに備えて多めに必要とこうわけさ
「また口クでもないこと考えていいそうですね って、ちょっと
吸いすぎでしょうー?」

「ズゴゴゴゴ」

「そんな全てを吸い尽くすような吸い方されたら俺はもつ……アーヴー」

……

目が覚めたら男子寮にある自室だった。

ここに戻ってきた記憶は当然無いが、修行を始めるようになつてからはよくあることだつたので特に気にしないことにしている。いつものように学校へ向かい、放課後もいつものように女子達の成長を脳内ハードディスクに保存し、いつもより早めの夕食を超包子で済ませた俺は早速警備担当区に向かつた。

そして、

「始まつたか　を？」

時刻は20時。

電力が落とされて学園は一気に闇夜に包まれ、唯一の光源は月の光だけだ。

同時に、急激に誰かの気配が膨れ上がるのを感じた。

「なーにが大事な用事だよ。やつぱ、ろくでもないことしそうとしてるんじゃないか。この方向は中等部の女子寮か？女子寮か……ふふふ、まさか危害を加えるとは思えないけど念のために行くべきだよな、うん。何かあつたら大変だものネ」

女子寮に行くべきだと本能が叫ぶのだ。だって、夜の真っ暗な女子寮ですよ？ キヤツキヤツウフフなドキワクイベントが見れるかも知れないじゃないですか。

相手は中学生？ そんなの関係ないね。だって、良くも悪くも中学生に見えない奴らばつかだしね。

そうと決めたらば、ささつと印を切つて分身を出現させ、その場

を任せた俺はすぐに女子寮へと向かつた。

女子寮へ向かう途中に誰かの話し声が聞こえたため、『早く向かえ！この機を逃すな！』という本能に抗い覗いてみると、そこにはスーツを着た可愛いいらしげの少年と人語を操るオコジョがいた。

「ここには僕一人で行く！」

「ええ？ 何バカなこと言つてんだよ兄貴！」

「（おっと、あれに見えるは噂のネギ少年じゃないか。こんなところで何をしてるんだ）」「

オコジョが喋つてることには突つ込まないのかつて？ ハハ、人形が武器持つて笑いながら殺しにくる世界ですよ？ 動物が喋るくらい問題ない。

「えーい、わからず屋！ もう知らねえよ！」

遠くの誰かにそんな説明をしていると、どこから取り出したのか銃やら杖やらその他諸々を身に着けたネギ少年は杖に跨るやいなや飛んでつた。ついでにオコジョはざつかいつた。

「何かあるとは思つてたけど、やっぱり魔法関係者か。それでもないとあの歳で先生は無いよなあ。魔法使いで先生なネギくんか。魔法先生ネギ……あれ？」

やつぱり聞き覚えがあるような……つて、そんな場合じや無かつた。早く向かわねば！

パツと行く
歩いて行く

「というわけで、パツと移動しました」

何が、『というわけ』なのかはさておき女子寮の中に侵入した俺は彼女の気配を追つてスニーキングミッションを開始した。もちろんダンボールは忘れないな。

「こ、これが女子中学生の生活空間つーすーはーすーはー……心無しか甘い氣がする…」

んなこたあない、どう見ても変態である。
それにしてもいくら電気が落とされているとはいへ不自然に静か過ぎた。

一箇所を除き人が動いてる気配がしないのだ。現代っ子がこんなに早い時間から寝てるわけもあるまいし、唯一その気配のある方向がエヴァンジエリンさんの気配がする
方向もあるわけで、

「寄り道したかつたけど、つとここだな。大浴場……つて風呂かよーうひょー！」

エヴァンジエリンさんナイスチョイス！本能がスタンディングオーベーションで讃美讃美する。だつて、女子風呂だもの。しかもお仕事中だから正当性があるもの。

まずは、中の様子を確認しなきやな。

「（お邪魔しまーす！ふむふむ、予想通りエヴァンジエリンさんに茶々丸、エプロンドレスを着た女子4人がネギ少年を揉みくちゃにして つて、あれ大河内じゃね？
何やつてんだよ、おい）」

言葉通り田の色が変わっている、エヴァンジエリンさんに何かされたか？ま、今はいいや。

にしても、5Pだと？まさか10歳でそんな歪んだ願望を持つているとはなかなかやるではないかネギ少年。

「ぐつ！」

「（ぐうつ、羨ましけしからんぞネギ少、ふおおおおおー・ぐつじよぶ！マジグつじよぶ！感動したつ）」

シユバツ

ネギ少年が投げた2つの液体が空中で交わると同時に、大河内と見知らぬ女子の服が弾け飛んだ。そして露わになる2人の（以下自主規制

いやいや、落ち着け。クールだ、クールになるんだ俺。

「（じうせなら近くに居た他の2人も脱がすべきだ、よつて60点。感動したは褒めすぎだよな、うん）」

落ち着く方向が明らかに間違っているとかそんなツッコミが聞こえるが気にしない。

とりあえず今すべきことは、携帯にネギ少年の勇姿を収めることだ。ほら、学園に報告する必要があるかも知れないし！

その過程で、裸の女の子が写っちゃつたりするのは仕方のないことである。ちなみに麻帆良製なので消音対策もばっちりだ。

「（むう、ネギ少年が邪魔で上手く撮れ）」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！大気よ水よ白霧となれ、

彼の者らに一時の安息を！眠りの霧！」

バフォツ

ネギ少年がかつちよいーポーズ決めつつ呪文を紡ぐと、気の抜けるような爆発音と共に白い霧が4人の元で発生。その内2人は察知して避けたものの、服を脱がされた2人はまともに喰らってしまいパタリと倒れる。ネギ少年はその2人を抱きとめ、床に仰向けに寝かせた。

「すいません、アキラさん亜子さん後で必ず吸血」

ネギ少年が2人に何か言つていたが、俺の頭の中はそれどころでは無かつた。

「（ふふおつ！ネ、ネギ少年なんてことを！？お前は神かつ、悪魔かつ！？）こ、この位置からだと足を向けて寝てているように見えるわけで、それはつまり……カハツ！」

なんという破壊力つ！高畠センセ、いや、キレたエヴァンジェリンさんすら凌ぐこの威力つ！いいだろうネギ少年、認めてやる。お前がナンバーワンだ！

噴出す鼻血にすら気づかず、この奇跡の光景を一瞬たりとて逃すまいと扉の隙間から一心不乱にカメラに収める。浴場の扉の向こうで破碎音やら爆音やら聞こえていたが

気にさえならなかつた。

俺が正気を取り戻したのは何十分後だつただろうか？いや、もしかしたら数分の出来事だつたかもしれない。つまりは時間感覚が狂う程度には我を忘れていたということだ。

いつの間にか被写体の間近に居るということが良い証拠である。無意識つて怖いねー。

そこで、気がついた。辺りに気配は確認できず今自由に動けるのは自分一人だけだということに。

「おこおこおこ、こんなところに女のが真っ裸で寝ているよ。どうするの? ねえ、どうするの?」

自分の心に語りかけると、一つの声が聞こえてきた。いわゆる天使と悪魔の声といふ奴だ。

『ハハハ、迷うことなえ頂いちまえ! おつと、氣づかれた時のためにちゃんと脅迫の材料はとつておけよ? ぐへへ』

『据え膳食わぬは男の恥ですよシノブ、彼女らはあなたに食べられるのを待っているのです。さあ、遠慮なくお食べなさい』
「オーケー、俺の中には外道な悪魔と丁寧な口調の悪魔しかいないことよーくわかった。俺も男だ、悪気しかないがお嬢ちゃん達はおいしく頂こうではないか。

はーはーはーはーはーと誰だこんな時に電話してくるおバカさんは

携帯のディスプレイにはオーナーと表示されている。つまりは超鈴音。

無視すると後が面倒そつなのでしぶしぶ電話に出た。

「もしもー」

『同じオトメとしてそれ以上は流石に看過出来ないネ』

「へ?」

『ドウしてもとこつのでアレば、楓サンに最初から今までの映像ヲ送るコトになるが良いカ?』

まさか、監視されていただとつ! ? 慌てて辺りを見回すがカメラは発見できない。相手はあの超鈴音である、巧妙に隠しているはずだ。

残念だがやむを得んな。

「ハハハ、冗談に決まってるじゃないですかー。無理矢理とかそんなこと出来るわけ無いですよーはつはつはー」

『俺も男だ、悪気しかないがお嬢ちゃん達はおいしく頂』『うではな
いか』

スピーカーから聞こえてきたのは聞き覚えのある外道のセリフ。

「いや」

『俺も男だ、悪気しかないがお嬢ちゃん達はおいしく頂』『うではな
いか』

「あの」

『俺も男だ、悪気しかないがお嬢ちゃん達はおいしく頂』『うではな
いか』

『すんません、もうしませんから!』

『わかれバいいネ。トウゼン画像の方モ』

『それはもう、はい!喜んで削除させていただきます!』

『ウム、なら良いアル。それより、エヴァンジエリンさんの方は良
いのかナ?』

『……忘れてた』

『早く行くと良いネ。では』

ツーシーツー、と寂しい音を響かせる携帯を操作しそうき撮つた
画像を片つ端から削除する。

「しかし俺の脳内に焼きついた光景は今もまだ残つてる……あ
ーもう、何やつてんだろ俺」

自身の行動に深い反省をしつつトボトボとエヴァンジエリンさん
の気配を追うのだった。

結局、俺が向かつた時には全てが終わったあとで、驚くべきこと
にネギ少年が勝つたということだけはわかつた。

停電が復旧するのがもう少し遅ければヒュアンジヒリンさんは
唸つていたが、それがどう勝敗に関係するのかはいまいちわからな
い。

吸血鬼だから暗い方が力を出せるということだらうか？

「ところでコゾー。お前、私とぼーやが去った後の大浴場で何をし
ていた？」

「え、」

「ふんっ、気づかないとでも思つていたのか？だが……口クなこと
をしていないかつたという事だけはわかつた、ぐだらんことが出来
んように血を抜いておいてやる。茶々丸」

「はい、マスター」

「覚悟するんだなコゾー」

「待つて！今日は血を充分出しているからこれ以上は生命活動に支障
が……アツ、アツ、アーツ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1694k/>

どこか遠く

2010年11月22日14時01分発行